原典研究

イブン・スィーナー著『治癒』形而上学訳註（第一巻第三章）

イブン・スィーナー『治癒の書』研究会
訳・註　小林　春夫
　　仁子　寿晴
凡例　加藤　瑞絵
索引　倉澤　理

凡例

- これは Ibn Sīnā, *al-Shifāʾ, Ilāhiyāt*（『治癒』形而上学）第一巻第三章の邦訳および訳註である。『治癒』全体の構成の詳細ならびに著作時期については、本誌第二号に掲載された小林春夫「イブン・スィーナー著『治癒』文献解題」（『イスラーム地域研究ジャーナル』二号（二〇一〇年）五七―六二頁）を、『治癒』形而上学既訳分は「イブン・スィーナー著『治癒』形而上学訳註（第一巻第一章および第二章）」（『イスラーム地域研究ジャーナル』三号（二〇一一年）七三―一一七頁）を参照されたい。
- Cを Anawati(tr.) I, pp. 22–24 にある正誤表により修正したものを底本とした。
- 底本の本文を変更する場合には、Cの異読ならびにIとその異読、およびBを主に使用し、その他二種註釈（Ṣadrā および Narāqī）と二種翻訳（Anawati(tr.) I, II および Marmura(tr.)）を適宜参照した。なおテキスト変更あるいは異読提示の際には煩瑣を避けるため、訳者解説で挙げた参照文献（　）内の略記を用い、「Iでは……」「Narāqī のテキストによると……」等と記すにとどめ頁数等詳細は省略する。
- 翻訳の段落分けは基本的にMに従い、段落番号を各段落一行目行頭右に［1］等と記した。さらに各段落一行目行頭上に底本としたカイロ版の頁数と行数（三頁八行目は3.8と記す）を附した。

（例）
3.8 慈悲[1]と成功の付与者たる神の助勢により……。

- 訳文中の〔　〕は訳者による補記を示し、（　）は訳者による簡単な説明や言い換えを示す。またアラビア語原綴を挿入する際にも（　）を用いた。
- 幾つかの事項、幾つかの説が列挙されている場合は議論をわかりやすくするために訳文中に①、②……、(1)、(2)……等の記号を挿入することがある。階層がない場合は①、②……を用い、階層がある場合には最上位の分類を(1)、(2)……、第二位の分類を(a)、(b)……、第三位の分類を(i)、(ii)……で記した
- アラビア語転写は LC 方式に準拠し、ター・マルブータは通常は -h で表記し、イダーファの場合は -t とする。また quwwah のように uw と単母音プラス子音で表記せず、qūwah とする。同じく -iyyah とせずに -īyah とする。例外的に、アリフ・マクスーラは ā ではなく通常の長母音と同様 ā とし、子音連続と単子音を区別するプライムは使用しない。
- 定冠詞 al- については、単なる用語や形容詞を示す場合は省略し、固有名詞やこれに類する場合にのみ al- を附けて記した。
- アラビア語転写は原則として立体とし、書名を表す場合にのみイタリックにした。
- ギリシア語の固有名詞は、アラビア語原音によらず慣例を優先した。

- 『治癒』形而上学内の参照の煩雑さを避けるために以下の形式を定めた。①公表された訳文の範囲内を参照する場合には巻・章・段落の番号を使用する（同一章内では同章［1］、同一巻内で章が異なる場合は同巻第一章［1］、章が異なる場合は第一巻第一章［1］等）。但し、テキストの異同など、細かい箇所を参照する場合にはCの頁数、行数を示す。②未公表の範囲を参照する場合にはCの頁数、行数及びMの巻・章・段落番号を次のように示す。*Ilāhīyāt*, p. 21, ll. 12–13 (Bk. III, Ch. 13, ¶1)
- 『治癒』内他巻を参照する場合には底本と同じカイロ版を用い、たとえば『カテゴリー論』第三巻第五章三一―五頁を指示するときには *Maqūlāt* III. 5, pp. 3–5 と記す。
- 参照の便を図るために『治癒』の構成と参照文献を凡例のあとに記した。
- 暫定的な議論の構成を作成し、各章の先頭に附した。
- 既訳分の語彙索引（第一巻第一章―第三章）を試験的に作成し、末尾に附した。

【『治癒』構成】

第一群　論理学（*Manṭiq*）

- **第一部門**　入門（*Madkhal* ＝イサゴーゲー）一二巻（maqālah）一八章
- **第二部門**　カテゴリー論（*Maqūlāt*）七巻三六章
- **第三部門**　命題論（*'Ibārah, Bārī Irumīnās*）一二巻一五章
- **第四部門**　推論（*Qiyās* ＝三段論法、分析論前書）九巻六四章
- **第五部門**　論証（*Burhān* ＝分析論後書）四巻四一章
- **第六部門**　トピカ（*Ṭūbīqā* ＝弁証論 *Jadal*）七巻三三章
- **第七部門**　詭弁論駁論（*Sūfisṭīqā*）一二巻九章
- **第八部門**　弁論術（*Khiṭābah, Rīṭūrīqā*）四巻二九章
- **第九部門**　詩学（*Shi'r*）一巻八章

第二群　自然学（*Ṭabī'īyāt*）

- **第一部門**　自然学（*Samā' Ṭabī'ī*）四巻五七章
- **第二部門**　天体論（*al-Samā' wa-al-'Ālam*）一巻一〇章
- **第三部門**　生成消滅論（*al-Kawn wa-al-Fasād*）一巻一五章
- **第四部門**　気象論（*Āthār 'Ulwīyah*）一二巻一一章
- **第五部門**　鉱物学（*al-Ma'ādin wa-al-Āthār al-'Ulwīyah*）一二巻一一二章
- **第六部門**　霊魂論（*Nafs*）五巻三一章
- **第七部門**　植物論（*Nabāt*）一巻七章
- **第八部門**　動物論（*Ṭabā'i' al-Ḥayawān*）一九巻五七章

第三群　数学（*Ta'līmīyāt, Riyāḍīyāt*）

- **第九部門**　幾何（*Uṣūl al-Handasah, al-Ustuqussāt li-Ūqilīdis*）一五巻
- **第一〇部門**　天文学（*Hay'ah, al-Majistī fī al-Hay'ah*）一三巻七七章
- **第一一部門**　算術学（*'Ilm al-Ḥisāb, Arithmāṭīqī*）四巻
- **第一二部門**　音楽学（*al-Mūsīqā*）六巻一六章

第四群

- **第一三部門**　形而上学（*al-Ilāhīyāt, al-Falsafah al-Ūlā*）一〇巻五九章

【参照文献】

底本

Ibn Sīnā, *al-Shifā', Ilāhīyāt(1)*, ed. by Qanawātī and Sa'īd Zāyid; *Ilāhīyāt(2)*, ed. by Muḥammad Yūsuf Mūsā, Sulaymān Dunyā & Sa'īd Zāyid, al-Qāhirah: al-Hay'ah al-'Āmmah li-Shu'ūn al-Maṭābi' al-Amīrīyah, 1380/1960.（= C）

底本以外のテキスト

Ibn Sīnā, *al-Shifā' (al-Ilāhīyāt) wa-Ta'līqāt Ṣadr al-Muta'allihīn 'alayhā ma'a Zubdat al-Ḥawāshī min Mīr Dāmād, al-'Alawī, al-Khānsārī, al-Sabzawārī, al-Mullā Sulaymān, al-Mullā Awliyā' wa-Ghayrihim*, vol.1, ed. by Ḥāmid Nājī Iṣfahānī, Tihrān: Anjuman-i Āthār va Mufākhir-i Farhangī, 1383 A.H./2004 A.D.（= I）

Avicenna, *The Metaphysics of the Healing*, ed. and transl. by Michael E. Marmura, Provo, UT: Brigham Young University Press, 2005.（= M）

Ibn Sīnā, *al-Ilāhīyāt min Kitāb al-Shifā*, ed. by Ḥasan Ḥasanzādah al-Āmulī, Qum: Maktab al-I'lām al-Islāmī, 1376.（= A）

註釈

Ṣadr al-Dīn al-Shīrāzī, *Sharḥ va Ta'līqah-'i Ṣadr al-Muta'allihīn bar Ilāhīyāt-i Shifā'-i Shaykh al-Ra'īs Abū 'Alī ibn Sīnā*, 2vols, ed. by Najafqulī Ḥabībī, Tihrān: Bunyād Ḥikmat-i Islāmī Ṣadrā, 1382 S.H./2003 or 2004 A.D.（= Ṣadrā）

Muḥammad Mahdī ibn Abī Dharr al-Narāqī, *Sharḥ al-Ilāhīyāt min Kitāb al-Shifā'*, ed. by Mahdī Muḥaqqiq, Tihrān: Mu'assasah-'i Muṭāla'āt-i Islāmī Dānishgāh-i Mak Gīl, Su'bah-'i Tihrān bā hamkārī-i Dānishgāh-i Tihrān, 1986 A.D.（= Narāqī）

翻訳

Avicenna Latinus, *Liber de Philosophia Prima sive Scientia Divina*, ed. par S. Van Riet, introduction doctrinale par G. Verbeke, vol. I (I-IV), vol. II (V-X), vol. III (Lexiques), Louvain: E. Peeters et Leiden: E. J. Brill, 1977–83.（= Avicenna Latinus, *Liber de Philosophia Prima*）

Avicenne, *La métaphysique du Shifā': livres I à V*, traduction française par Georges C. Anawati, Paris: Librairie Philosophique J. Vrin, 1978（= Anawati(tr.) I）; *La métaphysique du Shifā': livres VI à X*, traduction française par Georges C. Anawati, Paris: Librairie Philosophique J. Vrin, 1985.（= Anawati(tr.) II）

Avicenna, *The Metaphysics of the Healing*, ed. and English transl. by Michael E. Marmura, Provo, UT: Brigham Young University Press, 2005.（= Marmura(tr.)）

Avicenna (Ibn Sīnā), *Metafisica: La scienza delle cose divine (Al-Ilāhiyyāt) dal Libro della Guarigione*（*Kitāb al-Šifā'*）, transl. by Olga Lizzini, 2nd ed., Milano: Bompiani, 2006.（= Lizzini(tr.)）

Avicenna (Ibn Sīnā), *Libro della Guarigione, Le cose divine*, a cura di Amos Bertolacci, Trino: UTET, 2008.（= Bertolacci (tr.)）

岩見隆・木下雄介訳「アヴィセンナ『形而上学』（その一）」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第三九号（二〇〇八）一四一―一五四頁。

岩見隆・木下雄介訳「アヴィセンナ『形而上学』（その二）」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第四〇号（二〇〇九）一四一―一五九頁。

その他参照文献

Ibn Sīnā, *Dānish-nāmah-i 'Alā'ī: Ilāhīyāt*, ed. by Muḥammad Mu'īn, Tihrān: Dānishgāh-i Tihrān, 1331 S.H. / 1952 A.D.（= *Dānishnāmah, Ilāhīyāt*）

Ibn Sīnā, *al-Ishārāt wa-al-Tanbīhāt ma'a Sharḥ Naṣīr al-Dīn al-Ṭūsī*, 4 vols., ed. by Sulaymān Dunyā, 3rd ed., al-Qāhirah: Dār al-Ma'ārif, 1984–1994 A.D.（= *al-Ishārāt*）

Ibn Sīnā, *al-Najāh fī al-Ḥikmah al-Manṭiqīyah wa-al-Ṭabī'īyah wa-al-Ilāhīyah*, 2nd ed., Miṣr: Muḥyī al-Dīn Ṣabrī al-Kurdī, 1357 A.H./1938 A.D.（= *al-Najāh*）

Anawati, G. Sh.（= Qanawātī）, *Mu'allafāt Ibn Sīnā (Essai de bibliographie avicennienne)*, al-Qāhirah: Dār al-Ma'ārif, 1950.（= Anawati, *Mu'allafāt*）

Gihamy, G.（= Jīrār Jihāmī）, *Mawsū'at Muṣṭalaḥāt Ibn Sīnā*（*al-Shaykh al-Ra'īs)*, Lubnān: Maktabat Lubnān Nāshirūn, 2004.（= Gihamy, *Muṣṭalaḥāt*）

Mahdavī, Y.,*Fihrist-i Nuskhah'hā-yi Muṣannafāt-i Ibn-i Sīnā (Bibliographie d'Ibn Sina)*, Tihrān: Intishārāt-i Dānishgāh-i Tihrān, 1333 S.H./1954 A.D.（= Mahdavī, *Fihrist*）

Bertolacci, A, *The Reception of Aristotle's Metaphysics in Avicenna's Kitāb al-Šifā': A Milestone of Western Metaphysical Thought*, Leiden, Boston: Brill, 2006.（= *Recenption*; Appendix A, pp. 483–558 の校合表はBと略す）

Goichon, A.-M., *Lexique de la langue philosophique d'Ibn Sīnā (Avicenne)*, Paris: Desclée de Brouwer, 1938 (rep. 1999).（= Goichon, *Lexique*）

第一巻第三章　この学の有益性、序列、名称

議論の構成

一、**形而上学の有益性の探究（［1］～［5］）**

(1) **諸学の有益性**（manfa'ah）**には二種類ある**――**①善に秩序づけられる有益性と②相互補助（他の学の確立）の有益性**（［1］）

(i)「有益なもの」（nāfi'）と善（khayr）の間には違いがあり、「有益なもの」は善によって定義される（「有益なもの」の定義＝それ自体において善を導く原因）

……形而上学に先立つ諸学ですでに理解されている

(ii) 有益性も善（および有益なもの）によって定義される（「有益性」の定義＝それによって有益なものから善が導かれるもの）

……(i)の敷衍

(iii) すべての学は一つの有益性、人間の霊魂を現実態において完成させ、来世の幸福に向けて準備させること、を共有する

……有益性①の提示（(ii)および *Madkhal* I. 2 より）

(iv) 他方で、諸学間の相互補助としての有益性、他の学を確立に導く有益性、がある

……有益性②の提示（この有益性は諸学の冒頭に記される）

(v) 学に即した有益性②の定義（＝それによって他の学が確立に導かれるもの）

……(ii)の定義の書き換え

(2) **有益性②にも二種類ある**――**(a)限定抜きの用法**（mutlaq）**による有益性と(b)特殊な用法**（mukhassis）**による有益性**（［2］）

(i) 限定抜きの用法による有益性（＝（それによって）有益な学がいかなるかたちであれ他の学を確立へと導くもの）

……有益性②―(a)の定義（(1)―(v)の定義の書き換え）

(ii) 特殊な用法による有益性（＝（それによって）有益な学が上位の他の学を確立させるもの）

……有益性②―(b)の定義（(1)―(v)の定義の書き換え）

(iii) 特殊な用法による有益性の場合、有益な学はより高次の学のためにあり、その逆ではないから、高次の学は有益な学にとって目的のごときものである

……(ii)の補足

(3) **形而上学と他の諸学の、限定抜きの用法による有益性**（②―(a)）**／特殊な用法による有益性**（②―(b)）**との関係**（［3］）

(i) 形而上学は限定抜きの用法による有益性を持つが、特殊な用法による有益性はもたない

……テーゼ①（限定抜きの用法による有益性は下位から上位への方向も持つことが予想されるが、それは特殊な用法による有益性を持つことを意味しないか。この問題がまだ未解決である）

(ii) 他の諸学は形而上学にとって特殊な用法による有益性において有益である

……テーゼ②（テーゼ①で起こる問題はここには生じないので、そのまま受け取ってよい）

(4) **限定抜きの用法による有益性の三区分からの証明**（［4］～［5］）

(i) 限定抜きの用法による有益性の三区分――(a)有益なものが上位を導く区分、(b)有益なものが同等のものを導く区分、(c)有益なものが下位を導く区分（［4］）

(ii) 限定抜きの用法による有益性に固有の名称とは何か。三区分のうち(c)に着目した、下賜、供与、配慮、統御などが限定抜きの用法による有益性の名にふさわしい（［4］）

……テーゼ①の根拠（一）

(iii) 特殊な用法による有益性は奉仕（khidmah）に近く、限定抜きの用法による有益性を特徴づける供与（ifādah）は奉仕と似ていない（［5］）

……テーゼ①の根拠（二）

(iv) 従僕（奉仕する者）が主人（奉仕される者）を益するとともに、主人も従僕を益することは常識で考えて受け容れられるはずである（［4］）

……テーゼ①の根拠（三）

(v) 特殊な用法による有益性としての従僕が主人を益することと、限定抜きの用法による有益性としての主人が従僕を益することは、それぞれの固有相に着目する限り種が異なる（［4］）

……特殊な用法による有益性が限定抜きの用法による有益性と種が異なることを示してテーゼ①を確立する（テーゼ①の根拠（一）、（二）、（三）より）

(5) **形而上学の有益性の確認**（［5］）

(i) この学の有益性とは、(ア)個別的諸学の原理に確実性を与え、(イ)個別的諸学に共通する事柄（一であるかぎりの一、多であるかぎりの多、同や異、反対など）の何であるか（本質）を確定することであった

……有益性②に即した形而上学の有益性（一）の提示――形而上学と他の諸学との関係からみた有益性（(ア)は第一巻第二章［5］～［10］、(イ)は同章［11］より）

(ii) これは支配する者の支配される者に対する有益性であり、主人の従僕に対する有益性である

……有益性②に即した形而上学の有益性（二）の提示――(iii)の観点より

(iii) この学と個別的諸学との関係は、この学において求められる知の対象と個別的諸学において求められる知の対象との関係と同じであり、この学において求められる知の対象は個別的諸学において求められる知の対象が存在するための原理であるのと同様に、前者に関する学は後者に関する学が確定するための原理となる

……(ii)の理由

二、**形而上学の序列の探究（［6］～［12］）**

(1) **形而上学は自然学と数学の後に学ばれる――学びの順序における形而上学の序列（［6］）**

(i) 形而上学で論証なしに受け容れられる事柄の多くは自然学で明らかにされる。例えば、生成と消滅、変化、場所、時間、「動くものは動かすものに依存し、動くものは最終的に第一動者に帰着すること」

……自然学に関する(1)の理由

(ii) 形而上学のもっとも遠い目的である、至高なる創造主が〔世界を〕経綸すること、霊的な天使たちとその位階、天圏配列に見られる秩序の知は天文学に拠って導かれる

……数学に関する(1)の理由

(iii) 天文学が導かれるには算術学と幾何学がなければならない

……(ii)の補足

(2) **形而上学と下位学は学の原理に関して循環しない――原理に即した形而上学の序列（［7］～［10］）**

(i) 自然学および数学の原理がこの学においてのみ論証されるとき、これらの学における問題が形而上学の原理によって論証され、かつこれらの学における諸問題がこの学の原理になるとすれば循環証明である（［7］）

……学の原理に関する循環説の提示

(ii) 循環説を論駁するための三つの前提――①同一学内には一部の問題を論証するときにだけ使用される原理がある、②諸学には論証が存在しない前提だけを使って論証される問題がある、③学の原理には原因に拠る原理と感覚などに拠る原理がある（［8］）

……(iii)、(iv)、(v)を導くための前提

(iii) ⓐ「形而上学で受け容れられる自然学の原理」を導く原理は自明な場合がある（［9］）

……前提②を使用（*Burhān* II.9 より）。［9］では「形而上学で受け容れられる自然学の原理」ではなく「「形而上学で受け容れられる自然学の原理」を導く原理」が探究の対象とされる（(iv)、(v)も同様）。

(iv) ⓑ「形而上学で受け容れられる自然学の原理」を導く原理と「形而上学で受け容れられる自然学の原理」が解決する問題は別である（［9］）

……前提①を使用（*Burhān* II.9 より）

(v) ⓒ自然学と数学は事実の論証を与え、形而上学が根拠の論証を与える（［9］）

……前提③を使用（*Burhān* II.9 より）

(vi) 「形而上学で受け容れられる自然学の原理」は、㋐自明の原理から証明されるか、㋑自明の原理からではなく形而上学の原理から証明されるが、「形而上学で受け容れられる自然学の原理」が自らの原理を証明しないか、㋒自らの原理を証明するものの、事実の論証のみを受け持つか、のいずれかである（［10］）

……循環説が誤りであることの証明――ⓐ、ⓑ、ⓒを「形而上学で受け容れられる自然学の原理」に整理し、選言のかたちにまとめ、証明とする。

(3) **他の学なしにこの学の目的は達成できる――学びの順序ではなく、事柄そのものに即せば形而上学は単独で成立しうる（［11］）**

(i) 感覚的な事物からの推論に拠るのではなく、普遍的で知性的な諸前提を通して第一原理を定立する道がある

……他の学なしにこの学の目的が達成できることの理由

(ii) 普遍的で知性的な諸前提から、必然的存在者たる原理があること、その原理がいかなる仕方においても変化したり多であったりしえないことが第一巻第六章で導かれる

……(i)の詳細（一）

(iii) その原理が万物の原理であり、万物はその原理から秩序立って生じることが第九巻で導かれる

……(i)の詳細（二）

(4) **この学は、我々の側からすればすべての学の後に来るものであるが、それ自体に関して言うと、すべての学に先立つべきものである――二の結論（［12］）**

三、形而上学の名称の探究（［13］～［20］）

(1) **形而上学の名にふさわしいのは「自然の前のもの」である（［13］）**

(i) 形而上学は「自然の後のもの」についての学であるという場合の「自然」とは何か

(ii) 自然の二義――①運動と静止の原理、②物体的質料、運動と静止の原理から生成する事物や様々な附帯性の総体。「自然の後のもの」と言われる場合の自然は自然②のことである

……(iv)の前提

(iii) 運動と静止の原理としての自然（自然①）を有する自然物体（自然②）が「自然」と言われる場合は感覚される物体を指す

……(ii)の敷衍（*Samāʿ Ṭabīʿī* I.7 より）

(iv) 「自然の後のもの」とは、我々との関連において後にある

……「自然の後のもの」の規定を提示（(v)より）

(v) 我々が、何らかの存在を目撃し、その状態を認識するとき、まずは自然的存在（自然②）を目撃する

……(iv)の理由（(iii)の敷衍）

(vi) 我々との関連においてではなく、この学それ自体に着目するならば、この学にふさわしい名称は「自然の前のもの」についての学である

……「自然の前のもの」についての学をこの学にふさわしい名称として提示（(vii)より）

(vii) この学で探究される事柄は、それ自体に即して、また一般性において、自然①の前にある

……(vi)の理由（(ii)の自然の二義の区別より）

(2) **「自然の前のもの」の学が形而上学にふさわしいことへの懐疑（［14］）**

(i) 算術学及び幾何学で考察される純粋に数学的な事柄もまた「自然の前に」あるので「自然の前のもの」の学は形而上学に固有ではない

……懐疑の提示

(ii) 特に数は自然（自然②）の外にも存在するので、存在に関して自然（自然②）に依拠しない

……(iii)の前提（第一巻第二章［6］より）

(iii) 算術学及び幾何学は（我々にとって）「自然の後にあるもの」の学である（そのとき、事柄そのものに即せば、「自然の前にあるもの」の学となる）

……(i)の理由（(ii)より）

(3) **「自然の前のもの」の学が形而上学にふさわしいことへの懐疑に対する反駁（一）**
――幾何学に関して（［15］）

(i) 幾何学二部門の提示――①特定された線や面や立体だけを考察する部門、②端的な量を主題とする幾何学の部門
……(ii)、(iii)の前提

(ii) 幾何学の部門①の主題は自然（自然②）を離れず、その主題に伴う附帯性も自然（自然②）を離れないことはすでに知られている（したがって幾何学の部門①の主題は「自然の後のもの」ではない）
……反駁（一）――幾何学の部門①に関して（第一巻第二章［7］より）

(iii) 幾何学の部門②での量はいかなる比でも受容しうるものである
……幾何学の部門②での量の規定（第一巻第二章［7］より）

(iv) 幾何学の部門②での量は、自然学の原理であり、そして形相である限りの量ではなく、量である限りの、そして附帯性である限りの量である
……(iii)の敷衍

(v) (a)質料の非限定的延長としての量と(b)カテゴリーとしての量は異なり、「量」という語は同名意義的に使われる
……量の二義の区別、(v)の理由（論理学と自然学における規定、および第一巻第二章［7］より）

(vi) 真の幾何学の主題は（物体的質料に附帯する）量(b)である（したがって幾何学の部門②の主題は「自然の後のもの」ではない）
……反駁（二）――幾何学の部門②に関して（(iv)より）

(4) **「自然の前のもの」の学が形而上学にふさわしいことへの懐疑に対する反駁（二）**
――算術学に関して（その一）（［16］）

(i) 幾何学と較べて算術学（数の学）はより「自然の後のもの」の学であるように見える
……数の学における懐疑の深さの提示

(ii) 形而上学を「自然の後のもの」の学と言うときには、あらゆる面からみて「自然と異なるもの」の学を意味する
……形而上学に関する「自然の後のもの」の規定（一）

(iii) 至高なる神を知ることがこの学の到達点であることから「神的学」とも呼ばれるように、この学に含まれる最も高貴な部門によって「自然の後のもの」の学と呼ばれる
……形而上学に関する「自然の後のもの」の規定（二）

(iv) 物事は最も高貴な意味内容、最も高貴な部分、到達点に類する部分に因んで呼ばれるのが通例である
……(iii)が特殊事例でないことの理由

(v) 形而上学は、その完成態、最も高貴な部分、また第一の目的があらゆる面で自然を離れた事柄についての知であるような学である
……形而上学に関する「自然の後のもの」の最終規定（(ii)、(iii)より）

(vi) 数の学はその名の意味をこの学と共有しない
……反駁（一）――形而上学に関する「自然の後のもの」の規定に即して

(5) **「自然の前のもの」の学が形而上学にふさわしいことへの懐疑に対する反駁（三）**
――算術学に関して（その二）（［17］～［20］）

(i) 算術学が「自然の後のもの」の学の範疇にないことの確定的な説明が別にある（［17］）
……*Ilāhiyāt* III. 5 の先取り

(ii) 算術学はどの面から見ても数と言えるものを主題としない（［17］）
……テーゼ

(iii) 数の存在形態の三種――①〔質料から〕離在する事物の中に存在する場合、②自然的事物の中に存在する場合、③評価能力の中で、その数が附帯していた事物から離在した状態で、何らかの想定（種々の演算）が附帯している場合（［17］）
……テーゼを証明するための前提――数の存在形態の三種

(iv) 数の存在形態①では増加や減少に関して任意の比を受け容れず、数が定まっている（［17］）
……数の存在形態①の説明

(v) 数が任意の増加や任意の比を基体として受け容れるのは数の存在形態②と数の存在形態③の場合だけである（［17］）
……数の存在形態②と数の存在形態③の説明

(vi) 数の存在形態②と数の存在形態③は自然（自然②）を離れない（［17］）
……(v)への追加説明――数の存在形態②と数の存在形態③は「自然の後のもの」ではない

(vii) 算術学が数を考察するのは数の存在形態②と数の存在形態③のみである（［18］）
……算術学はどの面から見ても数と言えるものを主題としないことの理由（一）――数の存在形態①が算術学の対象ではないことおよび算術学の対象となる数の存在形態②と数の存在形態③は「自然の後のもの」ではないこと（(v)と(vi)より）

(viii) 算術学は数の存在形態③を第一に考察するように思われる（［18］）
……算術学と数の存在形態③の関係を再検討

(ix) 数の存在形態③が任意の増減や比を受容しうるのは、結合・分離・合一・分割が可能な自然の諸状態から抽出されたからである（［18］）
……数の存在形態③が自然に依存し、数の存在形態①が数の存在形態③と係らないことの説明（(vi)の補足）

(x) 算術学は数そのものに関する考察でもなければ、何の限定もない状態で数に附帯する性質に関する考察でもない。むしろ数が結合・分離・合一・分割を受け容れる状態となる時、数に附帯する諸性質を考察する（［19］）
……算術学が考察する数の規定およびテーゼの証明（(vii)、(ix)より）

(xi) 数そのものや、質料と関わらず、また質料に起源をもたない数に附帯する性質についての考察は形而上学に属する（［20］）
……(x)の敷衍、*Ilāhiyāt* III. 5 で詳述

訳

17.4 形而上学の有益性（manfa'ah）[1]について。[2]

この学に先立つ諸学において、[3]有益なものと善との違いは何か、有害なものと悪との違いは何か、また有益なものとは善をそれ自体によって導く原因であり、有益性とはそれによって有益なものから善が導かれるものであること[4]を承知しているはずである。このことが確認されているならば、すべての学は一つの有益性、すなわち人間の霊魂を現実態において完成させ、来世の幸福に向けて準備させるという有益性を共有することを知っていよう。[5]しかしながら、さまざまな書の冒頭で学の有益性が吟味されるとき、[6]そこで意図されるのはこうしたことではなく、学と学との補助関係[7]である。その場合、ある学の有益性とは、それによって他の学が確立[8]に導かれるものとなる。

17.13 [2]さて有益性をこの意味にとるとき、[10]非限定的に言われる場合と限定的に言われる場合がある。[11]非限定的に言われる場合、有益な学は――いかなる仕方であれ――他の学を確立へと導く。限定的に言われる場合、有益な学はそれ自身よりも高次の学を導く。このとき、有益な学はより高次の学のためにあり、その逆ではないから、高次の学は有益な学にとって目的のごときものである。

17.16 [3]有益性を非限定的な意味にとれば、この学（形而上学）には有益性がある。しかし有益性を限定的な意味にとるならば、この学はあまりに高次であるがゆえに、他の学にとって有益ではありえず、むしろ他のすべての学がこの学にとって有益なのである。

18.3 [4]しかし非限定的有益性を区分するならば、次の三つに区分されよう。[12]①〔有益なものが〕より高次なものを導く場合、②同等なものを導く場合、③より低次なものを導き、それ自身よりも低次の完全性を供与する場合である。これに固有の名称を探すとすれば、[13]下賜、供与、配慮、統御[14]がふさわしいであろう。またこの項に適した語彙を探索すれば、これらに類した〔別の〕名称を見つけることもできるだろう。

18.9 [5]さて、限定的有益性は奉仕に近いが、より高貴なものからより卑賤なものに行われる供与は奉仕と似ていない。従僕（奉仕する者）が主人（奉仕される者）を益するとともに、主人も従僕を益することを知っていよう。これは、有益性を非限定的に捉えた場合のことであり、〔従僕が主人に益することと主人が従僕に益することとでは〕有益性の種、つまりそれぞれに固有の観点が異なるのである。[15]われわれがすでにその観点を説明した、この学の有益性とは、個別的諸学の原理に確実性を与え、さらに、原理ではないが、個別的諸学に共通する[16]事柄の何であるか（本質）を確定すること[17]であった。[18]そしてこれは支配する者の支配される者に対する有益性であり、主人の従僕に対する有益性である。なぜならば、この学と個別的諸学との関係は、この学において目的とされる知の対象と個別的諸学において目的とされる知の対象との関係と同じであって、前者（この学の知の対象）は後者（個別的諸学の知の対象）が存在するための原理であるのと同様に、前者に関する学は後者に関する学が確定するための原理だからである。[19]

19.1 [6]形而上学の序列（martabah）について。

形而上学は自然学と数学の後に学ばれる。自然学について言えば、この（形而上学の）中で〔論証なしに〕受け容れられる事柄[20]の多くは自然学[21]において明らかにされているからである。例えば、生成と消滅、変化、場所、時間や、動くものは動かすものに依存し、動くものは最終的には第一動者に帰着することなどである。[22]また数学について言うと、この学（形而上学）のもっとも遠い目的[23]は、至高なる創造主が〔世界を〕経綸すること、霊的な天使たちとその位階、天圏配列に見られる秩序を知ることであるが、こうした知が導かれる[24]には天文学に拠らねばならず、[25]天文学が導かれるためには算術学と幾何学に拠らねばならないからである。これに対して、音楽学や数学の下位部門[26]、さらに倫理学や政治学は、形而上学にとって有益ではあるが[27]不可欠ではない。

19.10

しかし[7]、次のように問うこともできよう。自然学[28]および数学[29]の原理がこの学においてのみ論証され、これらの学における問題が〔この学において論証された〕原理によって論証されるとき、またさらにこれらの学における諸問題がこの学の原理になるとすれば、それは循環証明であり、結局のところ事柄をそれ自体によって証明すること（論点先取の誤謬）になるのではないかと。この疑義を解消するために述べるべきことは『論証』ですでに述べられ、解説もされているので[30]、その中からこの場に十分な程度を提示するにとどめる。

19.16

①[8]学の原理には、〔その学における〕あらゆる問題の論証が――現実態においてであれ、可能態においてであれ[31]――それに依拠するがゆえに原理とされるものだけではなく、一部の問題の論証においてのみ採用される原理もある[32]。②諸学には、仮定（仮設定理）[33]をまったく使わず、論証が存在しない前提命題（公理）だけを使って論証される問題もある。③学の原理はその原理の採用が原因にもとづく確信を与える場合にのみ真の意味での原理であるから、その原理が原因〔に基づく確信を〕を与えない場合には、別の仕方で学の原理と言われているにすぎない。そして〔後者の原理については〕感覚が原理だと言われるような仕方で原理と言われるのがふさわしい。なぜならば、感覚である限りでの感覚は〔根拠（なぜそうであるのか）ではなく〕存在（そのように在るということ）のみをもたらすからである[34]。

20.5

このとき[9]〔「7」で提起された〕疑義は解消する[35]。ⓐ自然学的原理（原理(2)[36]は自明な場合がありうる（上記②の前提を使用）。〔したがって第一哲学で解明する必要がなく、循環論法とはなりえない。〕ⓑ〔また解明の必要があるとしても〕第一哲学における自然学的原理の解明は、〔第一哲学の問題のうち〕その原理を用いて後ほど解明されるのでないもの（原理(3)）を用いてなされるのであって〔もしそうでなければ循環論法である〕、自然学的原理が第一哲学における別の問題の解明だけに用いられる場合がありうる[37]（上記①の前提を使用）。そのようであれば、高次の学（第一哲学）においてその原理（原理(2)）を導出する（解決する）ための前提となるもの（原理(3)）が、その原理を用いて問題を解決する際に〔解決されるべき問題として〕現われることはなく、それ（その原理からの導出）には別の前提が〔解決されるべき問題として〕現われるのである[38]。ⓒまた、自然学もしくは数学は我々に根拠の論証ではなく事実の論証を与え、その上でこの学が――特に（感覚から）遠い究極の諸原因に関して[39]――根拠の論証を与える場合がありうる（上記③の前提を使用）。

20.12

こうして以下のことが明らかになった[10]。自然諸学の問題で、ある仕方で形而上学の原理でもあるもの（原理(1)）は次の三つの場合のいずれかになる[40]。㋐形而上学において解明されるような原理（原理(2)）から解明されるのではなく、自明の原理から解明される場合がある。㋑〔原理(1)は自明の原理からではなく〕形而上学の問題である原理（原理(2)）から解明されるが、そのとき形而上学にある原理（原理(1)）が再びそれらの問題群（原理(2)）そのもの[41]（原理(3)）となるのではなく、別の問題群の原理となる場合がある[42]。㋒あるいはそれらの諸原理（原理(1)）は、形而上学において根拠（なぜそのようであるか）の解明が期待される事柄について、その存在（そのように在るという事実）を提示するがゆえに、形而上学に関わる事柄の原理となる場合がある。事態（自然学的原理と形而上学との関係）がこのようであるならば、あるものの説明にそれ自身が〔原理として〕採用されるような循環論法ではけっしてないことが分かる。

21.1

また次のことを知るべきである[11]。〔我々の学習の序列ではなく〕事柄それ自体に即して言えば、他の学を経ずに直接この学の目的を達成する方法がある[43]。というのも後ほど示唆するように[44]、感覚的な事物からの推論[45]によってではなく、普遍的で知性的な諸前提を通して第一原理を定立する道があるからである。すなわち、それらの諸前提から、存在には必然的存在者たる原理があること、その原理がいかなる仕方においても変化したり多であったりしえないこと、その原理が万物の原理であり、万物はその原理から秩序立って生じることが必然的に導かれる。ただし、我々自身の側の非力さゆえに、原

理から派生的原理へ、また原因から結果へと進む論証の道[46]で辿れるのは存在者の階梯のいくつかの群についてだけであって、〔それらの系列を〕詳細な仕方で辿ることはできない[47]。

21.9 したがって、この学は、我々の側からすればすべての学の後に来るものであるが、それ自体に関して言うと、すべての学に先立つべきものである。以上で、学全体におけるこの学の序列について論じ終えた。

21.12 形而上学[13]の名称に関して。

形而上学は自然の後のものについての[48]学である。ここで言う「自然」とは運動と静止の原理としての能力ではなく、物体的質料と〔運動と静止の原理としての〕能力から生成する事物と様々な附帯性の全体を意味する[49]。すでに述べられたように[50]、〔運動と静止の原理としての〕自然を有する自然物体が自然と言われる場合があり、そうした自然物体はそれが有する特性および附帯性によって感覚される物体[51]である。このとき「自然の後のもの」とは、我々との関連において後にあることを意味する。というのも、何らかの存在を目撃し、その状態を認識するとき、我々はまず自然的存在を目撃するからである。しかしこの学それ自体に着目するならば、この学にふさわしい名称は「自然の前のもの」についての学である。この学で探究される事柄はそれ自体に即して、また一般性において、自然の前にあるからである。

22.4 しかし[14]次のように言う人がいるかもしれない。算術学及び幾何学で考察される純粋に数学的な事柄もまた「自然の前に」ある。特に数はそうである。なぜならば、数は自然の外にも存在するので、存在に関して自然にけっして依拠してしないからである[52]。このとき算術学及び幾何学は〔我々にとって〕「自然の後にあるもの」の学[53]となるはずである。

22.8 この懐疑[15]に関しては以下のように言うべきである。幾何学には〔特定された〕線や面や立体だけを考察する部門[54]がある。その主題が存立において自然を離れず、ましてその主題に伴う附帯性[55]が自然を離れないことはすでに知られている。これに対して、端的な量（miqdār muṭlaq）を主題とする幾何学の部門においては、量はいかなる比でも受容しうるものとして把握される。自然学の原理であり、そして形相である限りの量にそうしたことは当てはまらず、むしろ量である限りの、そして附帯性である限りの量に当てはまる。論理学及び自然学における解説においてすでに知られているように[56]、質料の非限定的延長[57]としての量と〔カテゴリーとしての〕量（kamm）としての量とは異なり、量（miqdār）という名はこれら二つに同名異義的に用いられる。以上のようであるならば、真の幾何学の主題は、自然物体を成り立たせる量ではなく、線と面と物体について言われる〔カテゴリーとしての〕量であり、これが様々な比を受け容れるのである。

23.1 数[16]に関して言えば、懐疑はより解消しがたく、一見すると、数〔を探求する〕学は「自然の後のもの」の学であるように思われる。しかし〔ここで言う〕「自然の後のもの」の学は〔数の学が「自然の後のもの」と呼ばれるのとは〕別のことを、すなわちあらゆる面からみて「自然と異なるもの」の学を意味しているのである。また至高なる神を知ることがこの学の到達点であることから「神的学」とも呼ばれるように[58]、この学に含まれる最も高貴な部門によって〔「自然の後のもの」の学と〕呼ばれているのである。物事は最も高貴な意味内容、最も高貴な部分、到達点に類する部分に因んで呼ばれるのが通例である。したがってこの学は、その完成態、最も高貴な部分、また第一の目的があらゆる面で自然を離れた事柄についての知であるような学であることになろう。かくして〔「自然の後のもの」の学という〕呼称がこのような意味（完全に自然から乖離した事物を探究する学という意味）で用いられているとするならば、数の学はその名の意味をこの学と共有しないことになる。〔懐疑を解消させるための説明は〕これで十分である。

23.10 しかし[17]算術学[59]が「自然の後のもの」の学の外にあることの確定的な説明は別にある。後ほど明らかになることであるが[60]、算術学はど

の面から見ても数と言えるものを主題としているわけではない。その理由は以下の通りである。数は①〔質料から〕離在する事物の中に存在する場合と、②自然的事物の中に存在する場合と、③評価能力[61]の中で、その数が附帯していた事物――数が存在するためには何らかの存在する事物に附帯しなければならない――から離在した状態で、何らかの想定（種々の演算）が附帯している場合がある。そして数は、離在する事物の中にある限り（＝①）、増加や減少[62]に関して任意の比を受け容れることは不可能であり、あるがままの数として定まっている[63]。これに対して、数が任意の増加や任意の比を基体として受け容れうる[64]のは、可能態においてどのようにでも数えられる物体の質料の中にある場合（＝②）か、評価能力の中にある場合（＝③）だけであるが、いずれの場合も自然を離れることはない。

24.1 [18]したがって算術学は、自然の中にある数（②と③）だけがもつ観点が生じているものとして、数を考察しているにすぎない。また算術学は〔物体の中にある数ではなく〕評価能力の中にある数を第一に考察するように思われる。しかし数が評価能力の中でこうした〔任意の増減や比を受容しうるという〕属性をもちうるのは、結合・分離・合一・分割が可能な自然の諸状態から抽出されたものとして、評価能力が数を想定しているからである。

24.5 [19]したがって算術学は数そのものに関する考察でもなければ、何の限定もない状態で数に附帯する性質に関する考察でもない。むしろ数が先に示された事柄（結合・分離・合一・分割）を受け容れる状態となる時、数に附帯する諸性質を考察するのである。そしてこの時、数は質料的であるか、質料に起源をもつ人間の評価能力に関わるかである。

24.8 [20]他方、数そのものや、質料と関わらず、また質料に起源をもたない数に附帯する性質についての考察は、この学（形而上学）に属する[65]。

【註】

（1）有益性が伝統的なプロレゴメナの一部をなすことは第一巻第一章註3および本節註4を参照。論理学の有益性が *Madkhal* I.3 で論じられるが、その箇所は本節「形而上学の有益性について」と密接に関係する。註3を見よ。なお、以下「有益性」と「有益なもの」（nāfiʿ）は厳密に区別されているので注意が必要である。

（2）原文は ammā manfaʿatu hādhā al-ʿilm fa-yajibu... 「この学の有益性に関しては……である」という構文であるが、「この学の有益性に関しては」は fa 以下の一文だけに係るのではなく、［5］末尾までを支配する。

（3）「この学に先立つ諸学において」と言うが、ここまでの『治癒』の記述で、有益なものと善の違い、有害なものと悪の違い等を明示する箇所は見当たらない。善（khayr）と悪（sharr）に関しては *Ilāhiyāt* VIII.6（pp. 355f.）で定義されており、*Ilāhiyāt* VIII.6 を本文でイブン・スィーナーが言及した箇所ととる説もある。その場合、『治癒』の現行の構成ではなく、執筆に際して *Ilāhiyāt* VIII.6 が本文より先に書かれ、編集ののちにも執筆時の言及がそのまま残ったと考えざるをえないが、いささかアクロバティックである。とは言うものの、*Ilāhiyāt* VIII.6 がこの段落と連関することは疑いない。そこでは善が(a)「あらゆるものが希求する〔唯一の〕もの」と(b)「あらゆるもの（個々のもの）がそれぞれの定義にしたがって希求し、それぞれの存在が完成するもの」と二通りに定義される。(a)は、限定抜きの善、普遍的な善がそのまま提示されており、(b)の善は、普遍的な善が個々の存在が希求する限定的な善としていわば切り取られており、この段落の「すべての学は一つの有益性……を共有する」が(a)に、「さまざまな書の冒頭で」述べられる有益性は(b)にゆるやかに係ると見ることができる。

Ilāhiyāt VIII.6 ではなく、*Madkhal* I.3 に「この学に先立つ諸学において」というイブン・スィーナーの言葉の意味を求めるのが正しい。*Madkhal* I.3 では「知性を持つ人間という限りにおいて人間が完全な状態にあるとは、真理を、真理それ自体のために知り、善を行い、善を身につけるために善を知ることにあるが、人間の第一の本性および直観だけでは人間が完全な状態に至るにあまりに不十分なので……」という前提から獲得知の必要性および論理学の有益性が導かれている。（真や）善に至るためには「有益なもの」が必要だとの主

張である。*Madkhal* を『治癒』全体の基本設定と考えれば、*Madkhal* I.3 における論理学の有益性の記述が、以降の自然学、数学などの諸学（多分にこれらの学は獲得知である）の有益性へと繋がることは十分に想定可能である。このとき、『治癒』全体をみれば、*Madkhal* I.3（善と有益性が関連することへの言及）⟶論理学、自然学、数学⟶*Ilāhiyyāt* I.3（二種の有益性の区別）⟶*Ilāhiyyāt* VIII.6（二種類の善の提示）とイブン・スィーナーが段階的に善の理解を深めている過程が見えてくる。

（4）al-manfaʿah hiya al-maʿnā alladhī yūṣal bi-hi min al-sharr ilā al-khayr（有益性とはそれによって有益なものから善が導かれるものである）中の al-sharr を、Narāqī, C および I の異読に従って al-shayʾ と読む。この場合、具体的には al-shayʾ を「有益なもの」を指すと解することになる。なお、Narāqī 注から、この二種類の読みがすでに彼の時代に存在していたことが判る。al-sharr の読みを採用した場合の訳は、「有益性とは、それによって悪から善が導かれるものである」となる。

本文では「有益なものとは善をそれ自体によって導く原因である」および「有益性とはそれによって有益なものから善が導かれるものである」と「有益なもの」の定義と「有益性」の定義が併記されており、若干判りづらい。例を用いて整理しておくと、善（khayr）を健康であるとすれば、有益なもの（nāfiʿ）は健康をもたらす薬（善をそれ自体で導く原因）、有益性は薬効（解熱作用、鎮痛作用など）である。この例によると、有益なもの（薬）の定義は「健康をそれ自体において導く原因」、有益性（薬効）の定義は「それによって薬から健康が導かれるもの（薬から健康を導くもの）」となる。

有益なものの定義中の「それ自体によって」と有益性の定義中の「導かれるもの」の「もの」にコメントを加えておきたい。有益なものの「それ自体」とはまさに「有益性」、有益であること、である。言葉の上からも有益なものの本質は「有益性」、薬の本質は薬効であろう。逆に健康に対する有益さ（薬効）を持たなければ、「有益なもの」（薬）は有益なもの（薬）でなくなってしまう。このことを考慮すると、「それ自体によって」が有益なものの定義に含まれるのは次に有益性を定義するための布石と考えられる。有益性の定義中の「導かれるもの」の「もの」の原語は maʿnā である。ここでは「有益性」という、存在身分が不確かなものを指すために maʿnā が用いられている。maʿnā の一般的な説明は第一巻第一章註46を参照。有益なものを薬だと考えれば、有益なものはわれわれの感覚からすると実体性を伴った確固たるものである。しかし、解熱作用などの薬効に相当する有益性は通常レベルでは確固たるものとは呼べず、そうしたものがもつ何かを指す。ここでの maʿnā はそうした何かを表示するのである。

このような存在論には多分にアラビア語の構造が影響を及ぼしている。「有益なもの」の原語 nāfiʿ は n-f-ʿ 語根の能動分詞、「有益性」の原語 manfaʿah は同語根の動名詞である。つまり、manfaʿah という作用を持つものを表すための分詞が nāfiʿ である。これに対して「受益するもの」（善や健康）を表示するのは manfūʿ という受動分詞である。能動と受動の関係を考えると、manfūʿ（受益するもの）の第一義的な原因は nāfiʿ（有益なもの、益を与えるもの）であり、だからこそ、「有益なもの」は定義において原因とされていたのである。しかしながら、他方、この manfūʿ と nāfiʿ の因果関係を根底から支えるのは manfaʿah であり、manfaʿah を受けるがゆえに manfūʿ と呼ばれ、manfaʿah をもつがゆえに nāfiʿ と呼ばれる。「薬によって病が治った（健康になった）」と言う場合と、「薬に含まれる解熱作用によって病が治った（健康になった）」と言う場合とで我々はそれほど違いを感じず、両者の中の「～によって」は原因を表すと漠然と考えてしまうが、アラビア語の構造上は、この二つの言い方は厳密に区別されるのである。

（5）*Madkhal* I.2 に由来する。第一巻第一章［2］および同章註12、13を参照。

（6）「さまざまな書の冒頭で学の有益性が吟味されるとき……」と言うのは、新プラトン学派（アレクサンドリア、五―六世紀）においてアリストテレスおよびプラトンの哲学を講じるにあたり、それぞれの著作の冒頭で主題、有益性、学習の序列、名称などが論じられたことに由来する。とくにポルピュリオス『イサゴーゲー』冒頭やアリストテレス『カテゴリー論』冒頭に付された「序論」（prolegomena）はそれぞれ哲学入門、アリストテレス哲学入門の役割を果たし、必修科目とされた。L. G. Westerink, *Anonimous Prolegomena to Platonic Philosophy*, Amsterdom, 1962, XXV–XXXII を参照。また「序論」の内容は註釈書の一部として後代に伝えられ、さらにシリア語、アラビア語等に翻訳されてイスラーム哲学にも取り入れられた。こうした経緯については、D. Gutas, “Paul the Persian on the Classification of the

Parts of Aristotle's Philosophy: a Milestone between Alexandria and Baghdād,"*Der Islam* 60 (1983), pp. 231–266 を参照。だが、イブン・スィーナーは伝統的なプロレゴメナの形式にそのまま従っていないようである。

イブン・スィーナーとほぼ同時代の人アブー・ファラジュ・イブン・タイイブ（西暦一〇四三年没）は、『イサゴーゲー註解』序論第五教程でアリストテレス註釈者たちが慣習として記述するプロレゴメナ八門――①目的（gharaḍ）、②有益性（manfa'ah）、③題名（simah）、④書の段階（martabat al-kitāb）、⑤書の区分（内容・目次、qismat al-kitāb）、⑥書の著者（wāḍi'）、⑦教授法（記述法、anḥā' al-ta'ālīm）、⑧その書がどの学を扱っているか（min ayy al-'ulūm huwa）――に沿って『イサゴーゲー』にプロレゴメナを附しつつ、プロレゴメナ八門そのものについても考察を加えている。イブン・タイイブは註釈の対象となる書を複合体（物体）と見立てて、プロレゴメナが八門でなければならない理由を以下のように説明する。

> 複合体（murakkab）は名に即して考察されるか、複合体そのものに関して考察されるかのいずれかである。名に即して考察される場合、書に関しては題名を考察されなければならない〔＝③〕。複合体そのものが考察される場合には、複合体の本体（dhāt）について考察するか、複合体の附帯的性質について考察するかのいずれかである。複合体の本体についての考察には二種ある。その本体がどのように存在したかについての考察があり、書の場合は作用因としての著者の考察が生じる〔＝⑥〕。他方、本体が存在したあとの様態についての考察がある。この場合、質料についての考察と形相についての考察がある。質料についての考察には近接質料についての考察――書の場合は、当の書で述べられる学〔＝近接質料〕から書の位置づけを考察することになる〔＝④〕――、と遠い質料についての考察――書の場合は、諸学のうちのどの学をその書が扱うのかの考察になる〔＝⑧〕――がある。形相についての考察にも二種あり、近接形相の考察――書の場合は、目的の考察に相当する〔＝①〕――と遠い形相の考察――書の場合は、有益性の考察に相当する〔＝②〕――である。附帯的性質の考察には二つある。一つは量に関する考察で、〔書の場合は、書の区分（内容・章立て）についての考察に相当する＝⑤〕。もう一つは質に関する考察で、書の場合は、どの教授法（記述法）を使用しているかの考察である〔＝⑦〕。このようにして探求対象はちょうど八になる。（Abū Faraj ibn al-Ṭayyib, *Tafsīr Kitāb Īsāghūjī*, ed. by Kwame Gyekye, Bayrūt: Dār al-Mashriq, 1975, pp. 29f.）

プロレゴメナ八門はイスラーム世界でほぼ常識化していたようであり、Ṣadrāや Narāqī は *Ilāhīyāt* のプロレゴメナが八門を満たしているかを検討をしている（ともに第一章第四節への註釈でこの問題を論じる）。両者とも――むしろ Narāqī はṢadrā をそのまま踏襲しているのだが――⑥以外の七門が *Ilāhīyāt* のプロレゴメナで言及される（ただし、⑦の教授法ははっきりと記されているわけではない）のに対して、⑥書の著者（創設者）が明らかにされていないとし、その理由を形而上学の創設者（wāḍi'）が創設者と言うには偉大すぎる存在、神であることに求めている。最初に形而上学を書の形で編集したのがアリストテレスであることを認めつつ、学としての形而上学の根源を神に帰着させるのである。なお、wāḍi' という語は著者とも創設者とも採れる。イブン・スィーナーは註釈として *Ilāhīyāt* を書いたわけではないので、wāḍi' を強いて考慮に入れるなら「創設者」の意となる。Ṣadrā や Narāqī の見解がイブン・スィーナーの意図を正確に反映したものかどうかは問題だが、形而上学およびプロレゴメナ受容史の重要な一局面ではある。

内容が豊富になりすぎたので整理しておきたい。イブン・タイイブのプロレゴメナは学ではなく、この世に存在する書の形態を対象とし、物体を探求するのと同じ仕方で書を探求する。ここでのプロレゴメナは註釈序と理解されている。それに対して *Ilāhīyāt* のプロレゴメナは書ではなく、学を対象としており、この点でイブン・タイイブ風のプロレゴメナと好対照である。それとともにイブン・スィーナーはプロレゴメナ八門を明示化しておらず、八という数へのこだわりもない。*Ilāhīyāt* のプロレゴメナから八門を無理に析出しようとするよりも、イブン・スィーナーは伝統的プロレゴメナをいわば自由に再編成したと考えた方がいいだろう。ただし、この自由な再編成がいかなるかたちで行われたのかを問う際には、八門はなおメルクマールとして有効であり続ける。なぜ学の創設者が記されていないのか、なぜ教授法が明示されていないのかなどの問いは *Ilāhīyāt* の理解に繋がる大きな、そして重要な問題である。

（7）「学と学との補助関係」の原語は ma'ūnah ba'ḍi-hā fī ba'ḍin. 補助を意味する ma'ūnah は特に *Burhān* II.9 で相異なる二つの学の間の関

係を説明する際に使用される。例えば、「理由と事実に即した、二学間の補助関係（ma'ūnah al-'ilmayn）の違いを再び述べよう」（p. 178, ll. 8f.）や「以上が、ほとんどの場合における、理由に関して高位の学が（下位の学を）補助する（ma'ūnah al-a'lā）様態である」（p. 179, l. 14）などがある。*Burhān* II. 9 は次節「形而上学の序列について」で用いられるなど本章と係りが深い。

（8）「それによって」はアラビア語原文 ma'nan yutawaṣṣal min-hu ilā taḥaqquq 'ilm ākhar ghayri-hi のうち min-hu を bi-hi の意で訳したもの。直前の「有益性」の定義 al-ma'ānā alladhī yūṣal bi-hi min al-shay' ilā al-khayr 中の bi-hi（この代名詞が関係代名詞 alladhī を受け、具体的には「有益性」を指示する）がこの文章に欠けているため、bi-hi を補うか、min-hu を bi-hi の意で採るかのどちらかでなければならない。bi-hi を補った場合には min-hu 中の代名詞は「有益なもの」＝「ある学」を指すことになる。厳密には bi-hi を補って読むべきであるが、どちらも意味は変わらないため底本をそのまま採用した。Narāqī も min-hu を bi-hi の意で解する。

（9）「確立」の原語は taḥaqquq.（他の学の）存在が確立するとの意である。taḥaqquq には taḥqīq という異読があり、Narāqī はそちらを採る。taḥqīq は、（他の学の）存在を確立させる、という他動詞的な意味をもつ動名詞である。［2］の「非限定的に言われる場合、有益な学は――いかなる仕方であれ――他の学を確立へと導く」中で taḥqīq が用いられており、この箇所で taḥqīq という読みを Narāqī が選択するのは、それに合わせてのことである。あえて［2］に合わせる必要がないと判断し、底本のまま taḥaqquq と読んだ。

（10）「有益性をこの意味にとるとき」の「この意味」は、「学と学の補助関係（ma'ūnah）」、つまり他の学が確立に導く、学の有益性のことである。

（11）「非限定的に言われる」（yuqāl qawlan mutlaqan）と「限定的に言われる」（yuqāl qawlan mukhaṣṣiṣan, 厳密には「特定化して言われる」）の対比は、後代に非限定相（mutlaq）／限定相（muqayyad）の対概念として術語化され、さまざまな局面で使用される。イスラーム思想史では、哲学の分野だけではなく、神秘思想家イブン・アラビー（西暦一二四〇年没）の存在論において非限定相（mutlaq）／限定相（muqayyad）が大きな役割を果たすことはよく知られる。イブン・スィーナーはここで、非限定的に言われる有益性と限定的に言われる有益性のそれぞれに形而上学の有益性とその他諸学の有益性を振り分けつつ、非限定的に言われる有益性と限定的に言われる有益性が種において異なることを示し、形而上学とその他諸学を区別しようとする（もっとも読み方によっては別の解釈もありうる。註 15 を参照）。その試みは非限定的なものを限定的なものから弁別することによるもので、結果的には、限定的なものから弁別されるという意味で、非限定的なものもまた限定されたものにならざるをえないというアポリアを抱えることになる。しかしながら、その一方で、何がしかのかたちで限定された非限定相というアポリアはイスラーム思想において後にさまざまな発想を生むことになる潜在的エネルギーを孕むものであったという評価もできる。この分野の研究はまだ井筒俊彦「本質直観――イスラーム哲学断章――」『意識と本質』（岩波書店、一九九一年）三二〇―三五一頁くらいしか存在しない。本章第一巻第三章［15］でも量に関して、特定の量と端的な（非限定的な）量が区別され、両者は別物と捉えられ、同様の限定／非限定の構図が用いられる。

（12）「区分」の原語は aqsām. 分類を表すもっとも一般的な語である。以下述べられる三つの区分は、低次が高次を益する、同等のものに益する、高次が低次を益するというように高次／低次の別を分析的に組み合わせたものである。ここで単純に下位の学が上位の学を益するといった具合に「学」を補って読むわけにはいかない。その一つの理由は、非限定的有益性が学を起点に分類されているとすれば、形而上学より上位の学はないので、より高次なものを導く区分①が形而上学には当てはまらなくなることにある。形而上学の有益性は非限定的有益性の三区分のうちの②と③だけに相当すると考えることもできようが、その場合でも、②と③に限定された非限定的有益性は果たして非限定的と言いうるのか疑問が残る。もう一つの理由は単純に三区分の説明で「学」が用いられないことである。例えば①の原文を挙げると、qism yakūn al-muṣil min-hu muṣilan ilā ma'nan ajalla min-hu となっている。そこでは学（'ilm）ではなく、代わりに ma'nan が使われており、学の有益性ではなく、何か別の有益性が念頭に置かれていることが予想される。端的に言うなら、それは学が知ることを目的とするもの、学の対象である。［5］後半における学の対象と学との係りへの言及はこのことを意味していると考えられる。

（13）「これに固有の名称を探すとすれば」の「これ」の指示するものが何かに関して二通りの解釈がある。非限定的有益性の三区分のうちの③だけを指すとの解釈が一つ、もう一つは非限定的有益性全体を指すとの

解釈である。前者は「③より低次なものを導き、それ自身よりも低次の完全性を供与する場合である」中に「供与する」(yufīḍ) があり、名称の例としても供与 (ifāḍah) が挙げられることに拠る。だが、この解釈に拠ると、なぜ名称の問題を三区分のうちの③だけに適用するのかの説明がつかない。①と②の区分はどこに行ったのであろうか。

「これ」を非限定的有益性全体と採る場合には、この箇所が③に定位しつつ、非限定的有益性全体に名称を与えようとしていると解釈する。限定的有益性と比較して、特徴的な部分③に着目して非限定的有益性全体に名を与えているわけである。[4] 末尾の「この項に適した」の原語は fī hādhā al-bāb であり、区分 (qism) と異なる別の語が使用されている。bāb と qism を同じ意味に採ることは可能である (第一の解釈に帰着する) が、bāb をより上位におき、bāb⟶qism の序列が想定されていると考えることも可能である。次段落 [5] 冒頭で、限定的有益性と非限定的有益性が対比されていることもこの解釈の傍証となろう。「議論の構成」では第二の解釈に従った。

なお、非限定的有益性の三区分を別の角度から見ると、その三区分は、第一巻第二章 [16] [17] で論じられた形而上学の三部門 (①「結果としての存在者」の原因を探求する部門、②「存在者」に附帯する性質を探求する部門、③個別的学の原理を探求する部門) と対応すると考えられる。この対応関係は次段落 [5] で言及されている。詳しくは註18を見よ。

(14) 次段落 [5] 冒頭の khidmah を「奉仕」と訳したのに合わせて、ifāḍah, ifādah, 'ināyah, riyāsah をそれぞれ擬人的に「下賜」、「供与」、「配慮」、「統御」と訳した。一般的な意味をもち、[5] で khidmah と対比的に用いられる ifādah を除く三語は、イブン・スィーナーの形而上学において重要な意味を有する語である。ifāḍah は発出を意味する fayḍ に関連し、'ināyah は「摂理」とも訳しうる語で、*Ilāhiyāt* IX, 特に IX. 6 で第一原理を特徴付けるキー・タームとなる。riyāsah は早くも [5] でこの学の知の対象——つまり、第一原理——に関して使用される。いずれも第一原理に関わる語と理解される。

(15) 「有益性の種」と「固有の観点」を含むこの文は難解である。有力な解釈を二つ提示しておきたい。直前の「従僕が主人を益する」と「主人も従僕を益する」の両方が有益性を非限定的に捉えたときのことだとし、「種」と言われるのは [4] で述べられた非限定的有益性の三区分を指すと採る。つまり従僕が主人に対してもつ有益性の種とは区分①を、主人が従僕に対してもつ有益性の種とは区分③を意味すると解する。このとき「固有の観点」は、こうした有益性の「種」を生み出す二項関係、すなわち本文中で「高次」「低次」「同等」と言われていた二項間の相対的関係を指す。このような「種」と「固有の観点」はほぼ同一の内容を意味することから、後者は前者の補足ないし言い換えと考えるのが妥当である。これが第一の解釈であり、Naraqī は何種類か解釈を述べるものの最終的にこの解釈に傾いている。

第二の解釈は、直前の「従僕が主人を益する」と「主人も従僕を益する」のうちの後者のみを、有益性を非限定的に捉えたケースとし、「有益性の種」が異なるとは、直接には第一の解釈と同様、従僕から主人への有益性の種、主人から従僕への有益性の種が異なることと採るが、間接には、非限定的有益性の三区分で種が異なるとするのではなく、限定的有益性と非限定的有益性 (もちろん高次から低次への有益性に焦点を当てた非限定的有益性である) との間に種が異なりがあると考える。この場合、「固有の観点」とは限定的有益性の固有の観点——奉仕 (khidmah) ——と、非限定的有益性の固有の観点——供与——のことである。第二の解釈は限定的有益性と非限定的有益性に種の相違を見る点で奇妙に思えるかもしれない。非限定的有益性を限定したものが限定的有益性であって、その両者の関係は種と種の関係ではなく、類と種の関係に相当するように見えるからである。第二の解釈をとる場合には、非限定的有益性の三区分をそうしたカテゴリー的な区分とせずに、非限定的有益性が有する三つの構成要素と見なければならない。

モデルを提示しておこう。人間には植物的な部分 (栄養摂取)、動物的な部分 (自発的運動)、人間の人間たる部分 (知性の行使) の三部分があるが、それはカテゴリー的に考えて人間に植物的な人間と、動物的な人間と、人間たる人間がいるわけでない。人間の内部構造として三部分を有しているのである。この構図のもとでは、植物的な部分と動物的な部分に関して人間は他のあらゆる動物と違いがあるわけではない。植物的部分と動物的部分に即するかぎり人間はアルパカやゾウリムシなど他の動物と区別されるわけではない。人間を人間たらしめているのは、知性の行使である。人間とその他の動物は間違いなく種が異なるが、種の違いは、知性の行使に注目した人間の把握に依存するが、それと同時に人間の中に植物的な部分と動物的な部分がなくなるわけではないのである。これを非限定的有益性と限定的有益性に置き換えてみると、限定的有益性と対比されるかぎりの非限定的有

益性の特徴は③高次から低次への有益性にある。③ゆえにこそ種的に限定的有益性と区別される非限定的有益性が析出されるのである。

この解釈を採った場合、非限定的有益性の三区分のうちの①と②はどのような機能をもつと考えればよいのだろうか。特に①の低次より高次を導く有益性が何を意味するのかが問題になる。［1］でここまで主に論じられてきた学と学との補助関係とは別の「すべての学は一つの有益性、すなわち人間の霊魂を現実態において完成させ、来世の幸福に向けて準備させるという有益性」が提示されていたことを思い出してほしい。これは善への秩序づけのもとでの有益性であった。非限定的有益性の①は善、しかも相対的な善ではなく、絶対的な純粋善――これは第一原理そのものである――という高次のものへの形而上学の秩序づけが存在し、形而上学が純粋善、第一原理に対して有益性を持つことを意味すると理解できないだろうか。言い換えると、究極的には［1］で提示された二種類の有益性は深いところで、まさにこの形而上学において接続しているという理解である。もしそのように理解できるのであれば、形而上学の有益性を論じるこの節を全体として有意味な言説と見ることができる。

（16）Cは al-mushtarak fī-hā であるが、B、I および Narāqī に従って al-mushtarakah fī-hā と読む。

（17）Cの taḥaqquq をIとNに従って taḥqīq と読む。

（18）この文章冒頭の「この学の有益性」を修飾する「われわれがその観点を説明した」の「その観点」は、［2］の「有益性をこの意味にとるとき」、つまり「学と学の補助関係」で有益性を捉える観点を指す。「この学の有益性」が「我々がその観点を説明した」で限定されている以上、「この学」つまり形而上学の有益性は、以下で述べられる、個別的諸学の原理の確立や個別的諸学に共通する事柄の確立に限られないことが含意されると見なければならない。あくまでそれらは学と学の補助関係で見たかぎりでの有益性である。それ以外の形而上学の有益性が何であるかについての試論は註15で提示した。

ここで「この学の有益性」として提示される「個別的諸学の原理に確実性を与え」ること、及び「個別的諸学に共通する事柄の何であるか（本質）を確定すること」は、それぞれ第一巻第二章［5］～［10］と、同章［11］で述べられ、同章［16］で形而上学三部門（①究極的な諸原因を探求する部門、②存在者に附帯する性質を探求する部門、③個別的諸学の原理を探求する部門）にまとめられている。個別的諸学の原理に確実性を与えることは形而上学三部門の③に相当することは明白である。「個別的諸学に共通する事柄の何であるかを確定すること」は②に相当し、その内容は具体的に第一巻第二章［11］で「同様に、諸学に共通する事柄で、定義づけられ、霊魂の中で確証されなければならないにもかかわらず、どの学もそれに関する議論を担わないものがある。たとえば、一である限りの一、多である限りの多、同や異、反対などである。そしてある学はこれらを使用するだけであり、他の学はこれらの在り方について議論することなしに、その定義を採用するだけにとどまる」と言われ、形而上学がこれらの探求を担うとされている。形而上学三部門に関しては第一巻第二章註51などを参照されたい。

（19）第一巻第二章で明らかにされたように、形而上学は〈存在者である限りにおける存在者〉（非限定的存在者）を主題とし、それに附帯する事象を探究するが、個別的諸学は限定された存在者を主題とし、それらに附帯する事象を探究する。つまり後者は前者が探求し確定した事象や原理の一部を基礎定立としてはじめて学として成立するのである。このような上下関係（ヒエラルヒー）は個別諸学の内部でも見られる。たとえば算術学と音楽学（和声学）、幾何学と測地学、自然学と医学などの間に見られる。第一巻第二章の特に［16］［17］を参照。

（20）「受け容れられる事柄」の原語は al-umūr al-musallamah. 論証なしに受け容れられることの意味は第一巻第一章註32で解説した。

（21）「自然学」と訳した原語 ʿilm al-ṭabīʿī は単数である。単数形で表記されることの理由は判然としない。Marmura は単数であることに意味がないとして「自然的諸学 natural sciences」と訳すが、以下に挙げられる例（生成と消滅、変化、場所、時間、動くものは動かすものに依存し、動くものは最終的には第一動者に帰着すること）を見れば『自然学講義（*Samāʿ Ṭabīʿī*）』を特に指す可能性がある。また直後に述べられる数学の例では、天文学→算術、幾何学と数学の下位部門から数学の基幹部門へと遡っている。自然学の単数形表記が自然学の基幹部門を指すことの傍証となるかもしれない。

『知性的諸学の分類』（*Fī aqsām al-ʿulūm al-ʿaqliyah*）でイブン・スィーナーは、自然学の基礎学（asl）を自然学（アリストテレスの『自然学講義』にあたる）、天体論、生成消滅論、気象論、鉱物学、霊魂論、植物論、動物論の八部門とし、派生学（farʿ）として医学、占星術、観相学、夢判断学、護符学、魔術、錬金術の七部門を挙げる

(Ibn Sīnā, "Fī aqsām al-ʿulūm al-ʿaqlīyah," in *Tisʿ Rasāʾil fī al-Ḥikmah wa-al-Ṭabīʿīyah*, al-Qāhirah, 1908, pp. 108–111)。そこでの自然学基礎学八部門はそのまま『治癒』第二群「自然学」の下位八部門に相当する（「凡例」に附した「『治癒』の構成」を見よ）。イブン・スィーナーが本文で自然諸学中の上位／下位を意識していたとすれば、それは『知性的諸学の分類』における基礎学／派生学の別ではなく、『知性的諸学の分類』における基礎学中の上位／下位であり、基礎学中の上位学は「自然学」、下位学は残りの七部門である。『知性的諸学の分類』で自然学は「すべての自然諸学に共通する事柄を知る部門」と規定される。

(22)「生成と消滅」の原語は kawn wa-fasād. 完全と不完全を論じる *Ilāhīyāt* IV.3 で「不完全なものの例として生成と消滅の状態にあるこれらのものどもがある」(p. 189, l. 11) が挙げられる。以下、「変化」(taghayyur) の使用例は質料因、形相因、目的因について論じる *Ilāhīyāt* VI.4 の「およそ変化をもつものは一つの変化で目的に至るか、複数の変化で目的に至るかのいずれかである」(p. 280, l. 14ff.)、場所 (makān) の使用例は、量が附帯性であることを論じる *Ilāhīyāt* III.4 の「場所とは面である」(p. 118, l. 1)、時間 (zamān) の使用例は同じく III.4 の「以前に述べた箇所で、時間が附帯性であること、つまり時間が運動に依拠することがあなたに確立しているはずである」(p. 117, l. 7) などがある。「動くものは動かすものに依存し、動くものは最終的には第一動者 (al-muḥarrik al-awwal) に帰着すること」の使用例は *Ilāhīyāt* IX.1 の「先立つ自然諸学において、物体に帰属しない無限の力が存在し、その力が運動の第一原理であることがあなたにすでに明らかになっている」(p. 373, l. 13f.) である。なお「動くものは動かすものに依存し、動くものは最終的には第一動者 (al-muḥarrik al-awwal) に帰着すること」はアリストテレス『自然学』第八巻第四章および第五章にの原型がある。*Ilāhīyāt* IX.1 に引用される「無限の力」の議論は *Ilāhīyāt* XIII.10 にある。

(23) 形而上学の目的の遠近については第一巻第二章註70を参照。「もっとも遠い目的」として挙げられる「至高なる創造主が〔世界を〕経綸すること、霊的な天使たちとその位階、天圏配列に見られる秩序を知ること」は *Ilāhīyāt* の実質的な最終巻をなす第九巻（実際の最終巻である第一〇巻は第九巻を補足する）にある。*Ilāhīyāt* IX の巻題「第一なる経綸 (tadbīr awwal) から万物が発出し、第一なる経綸に帰還することについて」は至高なる創造主の経綸 (tadbīr al-bārīʾ taʿālā) に言及したものである。「経綸」は、*Ilāhīyāt* IX.6 で主に論じられる摂理 (ʿināyah) とほぼ同義である。「摂理」は「第一者がそれ自身のために、存在が善のもとにどのように秩序づけられるかを知っていること、第一者がそれ自身のために、可能的な状態に即した善や完全性の原因であること……」(*Ilāhīyāt* IX.6, p. 415, l. 7ff.) とされる。パラフレーズすると、第一者（創造主）は万物のためにではなく、自分自身のために（善に秩序づけられた）万物・世界の構造を知っており、自分自身のために、（第一者自身の純粋な完全性や善ではなく）可能的な存在である万物や世界の完全性や善の原因になること等々が「摂理」の内容、さらには「経綸」の内容となる。このように「摂理」や「経綸」は、第一者にある知の側面と原因としての側面を併せもった概念である。

「霊的な天使たち」(malāʾikah rūḥānīyah) は二種に大別される。一つは離在知性と同一視される（質料から）離在した霊的天使 (malāʾikah rūḥānīyah mujarradah)、もう一つは天体の霊魂と同一視される、実働する霊的天使 (malāʾikah rūḥānīyah ʿamalah) である。*Ilāhīyāt* IX ではほぼ一貫して知性 (ʿuqūl)、霊魂 (nufūs) が使われるが、*Ilāhīyāt*, X.1 劈頭で *Ilāhīyāt* IX の内容を概括するときにこうした言い換えが行われている。離在知性と天体の霊魂の秩序・階層については主に *Ilāhīyāt* IX.4 で論じられる。

(24)「天圏」の原語は aflāk (falak の複数形) である。天球に相当する語に kurah（幾何学的には球のこと）があり、それと区別しなければならないことと、多層的な天球を想定した場合に天球と天球の間にある空間を falak が指すと理解されることから、「天圏」を訳語とした。天圏は前述の霊魂を形相とし、その霊魂の支配により運動する。このように霊魂が天圏に係るがゆえに、「離在した」とは言われず、実際に働く霊的天使と同一視されたのである。「天圏」はある種の物理的な存在であり、天文学の考察の対象となる。*Ilāhīyāt* での天文学の使用例については註25を見よ。

(25) B、I、Narāqī に従い、C の yutawaṣṣal の後に ilayhi を附加して読む。これとほぼ同型の文章が次に ʿilm al-hayʾah lā yutawaṣṣal ilayhi illā bi-ʿilm al-ḥisāb wa-al-handasah とあり、yutawaṣṣal に ilayhi が後続していることが ilayhi を附加する理由である。

(26) *Ilāhīyāt* IX.2 末尾にプトレマイオス『アルマゲスト』への言及があ

る。以下の引用中で言われる「天球の運動の方向がさまざまに異なる」とは、各天球の回転軸がそれぞれに異なることを意味する。回転運動の方向と運動の遅速がさまざまに異なる、までが天文学の成果であり、それ以降は天文学の成果を使った形而上学的考察である。

『アルマゲスト』の技術（数理天文学）によって我々には以下のことが明らかになった。天球の運動が多であり、回転運動の方向と運動の遅速がさまざまに異なるので、それぞれの運動には他の運動と違う動者（muḥarrik）、他の運動と違う、欲求を起こす要因（mushawwiq）がなければならない。そうでなければ回転運動がさまざまに異なり、運動の遅速がさまざまに異なることはありえないだろう。（*Ilāhīyāt* IX. 2, p. 393, l. 6ff.）

天球の運動の動者（muḥarrik）は霊魂、欲求を起こす要因は知性である。霊魂と知性については註23を参照。『治癒』では数学的諸学をまとめた第三群のうち第一〇部門が天文学に当てられ、第一〇部門全体が『アルマゲスト』の内容を紹介する。「凡例」に附した「『治癒』の構成」を見よ。

（26）『知性的諸学の分類』では、自然学と同様に、数学も基礎学と派生学に分けられる。基礎学は算術学、幾何学、天文学、音楽学の四部門、派生学は算術学からの派生学としてインド式計算法の実践およびフワーリズミー『ジャブルとムカーバラ』の実践、幾何学からの派生学として測地学、各種機械製作学、光学、水利学、天文学からの派生学として天文ハンドブック（zīj）と天体位置推算暦（taqwīm）の作成、音楽学からの派生学として楽器の製作が挙げられる（Ibn Sīnā, “Fī aqsām al-‘ulūm al-‘aqlīyah,” pp. 111f.）。『治癒』第三群数学の下位四部門は『知性的諸学の分類』と同じである。註21で自然学に関して述べたのと同様、本文では天文学が算術学と幾何学に依存すると述べられ、基礎学四部門間の依存関係がズームされている。ただし音楽学と「数学の下位部門」が分けて書かれているので、そこでの「数学の下位部門」は『知性的諸学の分類』で言うと派生学に当たるものが念頭に置かれていると思われる。

（27）Cに即してそのまま nawāfi‘（有益なものを意味する nāfi‘の複数形）を採用し、「有益」と訳した。しかしNarāqī が採用する tawābi‘の読みも有力であり、こちらを採れば「第二義的で不可欠ではない」と訳すことになる。意味的にはこちらの方がよい。前節の主題「有益性」はこの章の重要なキーワードであり、直前の「こうした知が導かれる」「天文学が導かれる」では前節の「有益なもの」あるいは「有益性」の定義にあらわれるyutawaṣṣal ilayhi というフレーズが使用され、形而上学の目的の中のある種のものにとって天文学が有益である、天文学にとって算術、幾何学が有益だとほぼ明示的に語られている。それに加えて、「有益ではあるが不可欠ではない」というこれまでの「有益性」の議論にあらわれない別の概念を持ち込むのは議論を混乱させかねない。

（28）‘ilm al-ṭabī‘ahと単数形で表記される。註21で述べたように自然学の基幹となる『自然学講義』の内容を指すと考えられる。

（29）原語は al-ta‘ālīm. al-riyāḍīyāt（数的諸学）と区別するならば、自然学と同様、特に数学の基幹となる算術と幾何学を指すことになる。

（30）Marmura は *Burhān* II. 1（pp. 117-120）を該当箇所とする。そこでは、「すべての知は論証だけに拠り生起する」という偽なる命題を受け容れて、論証そのものがありえないと考えてしまう者、（論証そのものがありえないとは考えないが）論証の原理が循環してしまうと考える者に対して反論がなされている。結局「すべてのものが論証によって明らかにされる」というテーゼが誤りであることが導かれ、そのことによって論証とは何かの一端（「ある知のみが論証に拠って明らかにされる」）が解明される。確かに論証が循環を惹き起こすことをこの箇所は問題にするが、学と学の間の問題とはされておらず、直接の該当箇所とはしがたい。むしろ Narāqī の言う *Burhān* II.9（pp. 179, l. 14–180, l. 6）が該当箇所であろう。そこでは、循環のアポリアは提示されないが、二学間の原理のやりとりが主に論じられている。「この疑義を解消するために述べるべきことは『論証』ですでに述べられ」は、アポリアそのものが *Burhān* で提起されたとは言っていない。二学の間の原理のやりとりから生じるアポリアはまさにこの段落［7］で提起され、それを解消するために *Burhān* で述べられたことを使うという読み筋がよいだろう。*Burhān* II.9 該当箇所の内容は註35で紹介する。

（31）「現実態において原理に依拠する」「可能態において原理に依拠する」とは、その原理が問題の論証を行うときに実際に前提として使用されているか（＝現実態において依拠する）、あるいはその原理が実際に使用されているのではなく、問題の論証で使用する前提をさらに証明するため、あるいはその前提をさらに証明するために用いられる原理なのか（＝可能態において依拠する）の違いである。問題(A)を論証す

る場合を考えてみよう。問題(A)を論証するために前提（原理(1)）が必要だとしよう。その前提がさらに証明を必要とするものであれば、その前提を論証するための前提（原理(2)）が必要である。このようなかたちで原理(1) → 原理(2) → 原理(3) → 原理(4)……といった具合に前提ないし原理はさかのぼっていく。問題(A)にとって原理(1)は現実に原理であり、実際に前提として使用する。原理(2)以降を問題(A)が実際に前提として使用することはない。かと言って、問題(A)が原理(2)、原理(3)、原理(4)……に依拠しないわけではない。現実的にではなく、可能的に依拠するのである。

なお、「現実態において依拠する」「可能態において依拠する」は以上の用法とは別に複数の学に共通の原理に関しても言われる。複数の学に共有の原理（たとえば矛盾律）は、それがあまりに自明であり基礎的であるがゆえに、実際の論証においては非明示的に（いわば暗黙の了解として）用いられることがある。これを「可能態において依拠する」という。これに対して「現実態において依拠する」とは、共通の原理が明示的に用いられる場合である。ただしその場合でも、個別の学においては、「すべての量は等しいか等しくないかのいずれかである」や「同じ量に等しい量はそれらもまた等しい」のように、それぞれの学の主題に限定された形で用いられる。*Burhān* II.6 (pp.156f.) およびアリストテレス『分析論後書』第一巻第一〇章を参照せよ。

(32) この段落にある、①「学の原理には……」、②「諸学には……」、③「学の原理はその原理の採用が……」は前段落［7］で提起されたアポリアを解決するための三つの前提であり、これら三つの前提は個々に独立している。これら三つの前提を使って以下［9］でアポリアが解消されるので、本段落だけで三つの前提の連関を考えないほうが理解が早い。

(33) Cのwaṣfanはおそらく誤植である。Anawatiの正誤表によりwaḍ'anと読む（CをAnawatiの正誤表で訂正したものを底本としたので、底本通りということである）。M、B、I、Narāqīも同じ読みを採用する。waḍ'（仮定、または仮設定理）については*Burhān* I.12で以下のように規定される。

ある特定の学に即した論証の原理（前提）は、それ自体では中項を持つ（つまり、論証される必要がある）ものの、その当の学では仮定（仮設）される（yūḍaʿ, waḍ'an）にすぎないことがありうる。そうした論証の原理は、その当の学のその段階（仮定として使われる段階）では中項を持たないが、それ以前の学（それより高位の学）あるいはそれと同等の学にその中項があるか、あるいはその段階以降のその当の学にその中項があるかのいずれかである。（*Burhān* I.12, p.110）

すなわち、中項を持たない公理としての前提ではなく、中項を持つ定理（中項によって論証されなければならない前提）は、ある特定の学に即した場合は、後に中項によって論証されるのであれば、当座は中項によって論証されることなく使用されることがあり、それがwaḍ'の語で表される。waḍ'の用法はこれだけに限られず、学の主題設定、主題の措定の意でも使われる。第一巻第二章［3］および同章註11を参照。

(34) この前提③では、論証の基本的分類である根拠の論証と事実の論証の区別に言及されており、次段落［9］末尾でこれらの用語が実際に使われる。根拠の論証と事実の論証については第一巻第一章註41を見よ。なおここでは感覚しか言及されないが、ベースとなる*Burhān* II.9では感覚のほかに経験（tajribah）が附加されている（p.180, ll.1f.）。感覚と経験の組み合わせは第一巻第一章［16］にすでにある。経験については同章註47で触れたので参照されたい。

(35) この段落の証明はきわめて判りにくい。*Burhān* II.9 (pp.179, l.14–180, l.6) の議論を前提としつつも論理学上での問いから形而上学的な問いに変換されているからである。*Burhān* II.9の該当箇所を分析的にパラフレーズしておきたい。

1 大抵の場合は、低次の学が高次の学から（低次の学における問題を解決するためになされる）「根拠の論証」の原理を受け取るが、まれに高次の学が低次の学から根拠の論証の原理を受け取ることがある（その原理によって高次の学の問題が解決される）。

2 高次の学が低次の学から根拠の論証の原理を受け取る場合、低次の学から受け取られる原理（＝原理(1)）の身分を問わなければならない。

3 低次の学から受け取られる原理（＝原理(1)）自体は何によって確立したのか。

4 ①高次の学で確立した原理（＝原理(2)）によってその原理（＝原理(1)）が確立したのか、②高次の学で確立した原理を使わずにその原理が確立したのかのいずれかである。

5 ①の場合、原理(1)が原理(2)によって証明されたのちに、原理(1)は高次の学内の問題群を証明する。このとき原理(1)は原理(2)を問題として証明することはない。

6 （原理(1)も原理(2)も原理(1)で証明される問題群もすべて複数形で記されている。また原理は公理でない限り他の何かによって証明されるので原理は問題と言い換えられる。これらによって、原理(1)＝問題群(1)、原理(2)＝問題群(2)、原理(1)で証明される問題群＝問題群(3)とする）＝筆者の補足

7 高次の学内では、問題群(1)を媒介として、問題群(2)が問題群(3)と比して原理たるものになる。そのとき、問題群(1)は問題群(2)よりも原理たるにふさわしいものである。

8 viiは以下のようにパラフレーズされる。或る学の問題群（原理(1)）が他の学の原理（原理(2)）によって証明され、その後、その当の学の問題群（原理(1)）は他の学に属する別の問題群（問題群(3)）の原理となる。

9 ここに循環はない。

10 ②の場合、(a)自明であるか、(b)感覚や経験によって証明されるかのいずれかである。

11 これらは、「個別的学の問題」の原理＝「高次の学の問題」の原理なので、個別学の媒介により「高次の学の問題」の原理となる。

12 (b)で証明された原理は、低次の学でも（相対的に）高次の学でも根拠（の論証）が与えられない。

13 12の例外として、(b)で証明された原理が最上位の学で、自明の原理を根拠とする、根拠の論証が与えられる場合がある。

14 以下、四原因に関して普遍学（最上位の学）で根拠の論証が与えられ、個別学で事実の論証が与えられる可能性が論じられる。

パラフレーズから判るように *Burhān* II.9 の該当箇所は「高次の学が低次の学から根拠の論証の原理を受け取る」場合の分類を論じる（1）。大きくは①高次の学で確立した原理（＝原理(2)）によってその原理（＝原理(1)）が確立したのか、②高次の学で確立した原理を使わずにその原理が確立したのかの別である（4）。ここで重要なのは、この区別には原理(1)の確立が根拠の論証に拠るのか、拠らないのかという判断基準が係っていることである。以下、②が(a)自明であるか、(b)感覚や経験によって証明されるのかのケースに分けられるが（10）、(b)の方は事実の論証によって確立すると言い換えられているからである（14）。

本文［9］（およびそれを受ける［10］）ではこの分類が以下のように組み替えられる（以下原理(1)等は上記パラフレーズのものを使用し、［9］［10］の訳の補いでも同じ意味でこれらの記号を使用した）。まず大きな分類として、自然学や数学に由来する形而上学の原理（原理(1)）を確立する原理（原理(2)）が自明か、否かに分かれる。自明であるケースは［9］のⓐである（*Burhān* II.9 では②—(a)）。原理(2)が自明でないならば、原理(2)が形而上学内の原理（原理(3)）によって証明されなければならないものになる。ここで形而上学内で原理(2)の側が(3)にどのように係わるのかが問われる。間違いなく循環しないのは、原理(2)が原理(3)の原理とならない場合である。原理(2)は原理(3)から導かれたので、翻って原理(2)が原理(3)の原理となる（原理(3)を導く）ならば循環しそうに見えるからである。原理(2)が原理(3)に導かれつつ、原理(2)が原理(3)の原理とならない場合、これが［9］のⓑ（*Burhān* II.9 では①）に相当する。では一見循環しそうな原理(2)が原理(3)を導く場合はどうか。原理(2)が原理(3)を導くケースでの導き方と、原理(3)が原理(2)から導かれるケースでの導かれ方が異なるならば循環とは言えなくなる。これが［9］のⓒ（*Burhān* II.9 では②—(b)）であり、循環の可能性を消去するために使用される導かれ方を弁別するのは「根拠の論証」／「事実の論証」である。原理(2)が原理(3)を導くケースでは前者が後者に「事実」を与え、原理(3)が原理(2)を導くケースでは前者が後者に「根拠」を与えるのである。

Burhān II.9 の分類が「根拠の論証」なのか、そうでないのか、から始まるのに対して、［9］では原理が自明なのか、そうでないのかから始まる。論理学的主題に沿った *Burhān* II.9 の分類が［9］では形而上学的に組み替えられているのである。「根拠の論証」が論理学的なことは当然のこととして、自明性が形而上学においていかなる意味合いを持つのか。第一巻第二章［12］では形而上学の主題である「存在者である限りの存在者」が「それが何であるかについて学び、その存在を確定する必要がない」ものとされ、形而上学の主題が自明性の頂点に立つものと規定されている（むしろ証明されているのであるが、それについては同章註44を見よ）。主題に附随する性質を探究するのが学の役割であるから、自明性からの拓きが形而上学の使命である。その意味で上記の分類項の組み換えは形而上学的になされたと

評定しうる。

すでにお気づきかもしれないが、*Burhān* II.9 のパラフレーズ中（5～9）と［9］のⓑの議論は一段ずれている。すなわち *Burhān* II.9 のパラフレーズ中（5～9）では原理(1)を起点にするのに対して、［9］のⓑでは一つ上の原理(2)を起点に議論が展開する。［10］では再び原理(1)を起点とした議論に戻っている。この意味で、*Burhān* II.9 と真の意味で対応するのは［10］である。簡単に言うと、［9］で形而上学固有の問題として探索された問題が、［10］で *Burhān* II.9 と対応するかたちで証明としてまとめられたことになる。［9］と［10］の論じ方の違いについては註40を見よ。

（36）原語は al-mabda' al-ṭabrī. Narāqī は al-mabda' al-ṭabīʿī をとる写本と al-mabda' lil-ṭabīʿī をとる写本を挙げ、自身は後者の読みをとる。I の異読に al-mabda' lil-ṭabīʿī という読みは含まれず、わずかに C の異読に記載されるにとどまるため採用できないが、Narāqī がとる読みの方が整合的であり、正しい可能性が高い。al-mabda' lil-ṭabīʿī の方は、自然学探究（ṭabīʿī）のための原理、つまり自然学における問題（＝形而上学で原理として使われるもの）を解決するための原理と解することになるが、底本の al-mabda' al-ṭabīʿī は自然学的原理、つまり形而上学で原理として使用される自然学の問題を指すことになり、前者とは違う対象を指示していることになる。

Narāqī の読みが正しい可能性が高いことは［9］と［10］を見較べれば判る。［9］では「自然学的原理」自体が自明か否かが述べられるのに対し、［10］では「自然諸学の問題で、ある仕方で形而上学の原理でもあるもの」(al-mabda' al-ṭabīʿī mā huwa mabda' bi-wajhin mā li-hādhā al-ʿilm min al-masā'il allatī fī al-ʿulūm al-ṭabīʿiyah) が自明の原理から解明されるか否かが問題になる。自明か否かが問われているのは「自然諸学の問題で、ある仕方で形而上学の原理でもあるもの」＝「自然学的原理」なのではなく、そうした「自然学的原理」の原理、つまり「自然学的探究のための原理」である。［9］は意味的に「自然学的探究のための（＝自然学の問題を解決するための）原理」をとるべきであろう。訳語はテキストに沿って「自然学的原理」とするが、「自然学的原理」を「自然学的探究のための原理」（＝「自然学的原理」の原理）と読み替えていただきたい。なお訳文中でこの解釈に従って、適宜、原理(1)や原理(2)と補っておいた。「自然諸学の問題で、ある仕方で形而上学の原理でもあるもの」＝「自然学的原理」が原理(1)、「自然諸学の問題で、ある仕方で形而上学の原理でもあるもの」の原理が原理(2)に相当する。

最後に注記しておくと、al-mabda' al-ṭabīʿī は、「自然学的原理」と訳しているが、もう少しゆるく「自然学に係わる原理」と訳すこともできる。［9］が形而上学を場面として、その中で「自然学に係わる原理」がいかに働いているのかを問うものなので、「自然学に係わる原理」を、自然学から採択され、形而上学で用いられる原理ではなく——これではまだ形而上学内での固有の原理ではない——、自然学から採択された原理を導く形而上学内の原理を意味的に表示していると考えることも可能である。この場合には、自然学から採択された原理を導くという点で「自然学に係わる」からである。しかし若干穿ちすぎであろう。

（37）この文章はややこしい。「その原理を用いて後ほど解明されるのでないもの」やその後の「第一哲学における別の問題」の「別の」などがそうしたややこしさを生み出している。「その原理（自然学的原理）を用いて後ほど解明されるもの」とは自然学的原理により導かれる（解決される）形而上学（第一哲学）問題群（問題群(1)）のことである。もし反対に、その形而上学問題群が原理となって自然学的原理を導くとするならば、その瞬間に循環のおそれが出てくる。したがってその種の循環を避けるためには、第一哲学における自然学的原理の解明は問題群(1)を原理とするのでなく、問題群(1)でないような形而上学問題群(2)を原理とするのでなければならない。なお、問題群(1)であれ、問題群(2)であれ、それらの問題がいったん何らかの原理によって解明されれば、原理として使用されることを憶えておいていただきたい。このとき形而上学問題群(2)は自然学的原理（＝原理(2)）の解明に用いられるので、原理(3)としておく。以下「自然学的原理が第一哲学における別の問題の解明だけに用いられる」というときの「別の問題」とは、自然学的原理を導出する形而上学問題群(2)（＝原理(3)）ではない「別の問題」、つまり問題群(1)のことである。

本文中以下「そのようであれば……」(ḥattā…) も基本的には上記の説明で十分であろう。加えるならば、「それ（その原理からの導出）には別の前提が［解決されるべき問題として］現われるのである」が意味するのは、形而上学問題群(2)ではない別の問題群（形而上学問題群(1)）が「別の前提」として現れるということである。この「別の前提」（＝形而上学問題群(1)）には原理(1)が含まれることは当然であろ

う。ここで「別の前提」というのは、この原理(1)を意識してのことである。原理(1)は「自然諸学の問題であり、ある仕方で形而上学の原理でもあるもの」である（註36を見よ）。原理(1)は形而上学の原理なので、形而上学内の問題を解決する。したがって「前提」と呼ばれるのである。この「別の前提」を用いて解決されるものは形而上学問題群(1)でも形而上学問題群(2)でもなかろう。訳では出てこないが形而上学問題群(3)としておく。ⓑの議論の内容については註35も参照せよ。特にそのなかの *Burhān* II.9 のパラフレーズ（6～7）での「問題群」と照合していただきたい。

（38）原語は la-hu muqaddamah. この中の代名詞「それ」(hu) が指す内容についてさまざまな可能性がある。さしあたり①「原理の導出（解決）」(intāj dhālika al-mabda')、②「原理からの導出（解決）」(intāju-hu min dhākika al-mabda')、③「前提（なるもの）」(mā hūwa muqaddamah) の三つの可能性が考えられる。Marmura 訳は②を採用しており、大まかにはそれが妥当だと思われる。直前の文章も含めて原文を記すと、yakūn mā huwa muqaddamah fī al-'ilm al-a'lā li-intāj dhālika al-mabda' lā yata'arraḍ la-hu fī intāji-hi min dhālika al-mabda' bal la-hu muqaddamah ukhrā となっている。bal 以下の下線部が問題の箇所である。bal の前と後は対応しており、bal の前を簡単にまとめると「高次の学においてその原理を導出するための前提となるものは、その原理から問題を解決する際に〔解決されるべき問題として〕現われることはなく」となるが、それに合わせるなら、bal 以下は「〔高次の学においてその原理を導出するための前提とならないものではなく、その原理を導出するための前提ではない〕別の前提が、その原理から問題を解決する際に〔解決すべき問題として〕現われる」となる。少しややこしいが、別の前提とは、その原理を導出あるいは解決するための前提ではなく、そうしたものに係らない問題を解決するための前提を指すと考えられる。「別の前提」というのは、「別の問題を解決する前提」とする方が理解しやすいかもしれない。厳密に言うと、bal より前の lā yata'arraḍ la-hu fī intāji-hi min dhālika は「その原理からxを結論づける際のそのxに～は現われない」であるから、bal 以下を補足して読めば、「その原理からxを結論づける際のそのxに別の前提が現われる」となるので、la-hu 中の代名詞はxに相当することになる。

（39）「遠い究極の諸原因」の原語は 'ilal ghā'iyah ba'īda. ［9］が下敷きにする *Burhān* II.9 では四原因（作用因、目的因、形相因、質料因）を自然学が事実の論証を形而上学に与え、形而上学が根拠の論証を自然学に与える例として挙げられていた。註35における *Burhān* II.9 該当箇所のパラフレーズを見よ。ところが「遠い」(ba'īda) が附加されているのを見ると、「遠い究極の諸原因」は四原因そのものを指すわけではないようである。おそらく、訳本文で補ったように「（感覚から）遠い究極の諸原因」であり、具体的には第一原理や天の諸知性を指すものと思われる。「究極の」と訳した ghā'iyah も「目的因」の方向で押さえるべきかもしれない。註35や註42で述べるように、［9］は *Burhān* II.9 の内容を形而上学的に把握しなおしたものである。*Burhān* II.9 の「四原因」から［9］での第一原理や天の諸知性への転換もそうした形而上学的再把握の一環をなすと考えられる。

（40）［10］は［9］を単に言い換えただけのように見えるが、構造が大きく異なる。［9］ではⓐ、ⓑ、ⓒそれぞれについて可能性があることを述べるにすぎないが、［10］はそれを選言のかたち（ア）or（イ）or（ウ）でまとめている。意味するところは以下のことである。（ア）は原理(1)が自明な原理から解明される場合、（イ）は原理(1)が自明な原理から解明されず、（形而上学の問題でもある）原理(2)から解明されるが、原理(1)が原理(2)の導出にかかわらない場合、（ウ）は原理(1)が自明な原理から解明されず、（形而上学の問題でもある）原理(2)から解明されるが、そのとき原理(1)が原理(2)の導出に係わる場合である。（ウ）は根拠の論証と事実の論証の問題を扱っているのでわかりにくいが、原理(1)が原理(2)の導出に係わるか、否かに関して（イ）とは逆のケースになっている。（ア）、（イ）、（ウ）が選言として閉じた構造（それ以外の選択肢がない構造）を持つことが以上の整理で明らかであろう。原理(1)はその三つのいずれかでしかありえない。そしてその三つの選択肢のそれぞれが不可能な選択肢でないことが［9］で示されているので、［7］で言われる循環論法の疑いが晴れるのである。註35も参照されたい。

（41）底本の li-'ayni-hā を B および I に従って bi-'ayni-hā と読む。

（42）「形而上学の問題である原理（原理(2)）から解明されるが、そのとき形而上学にある原理（原理(1)）が再びそれらの問題群（原理(2)）そのものの原理（原理(3)）となるのではなく、別の問題群の原理となる場合がある」の特に問題群に関してコメントしておきたい。これが［9］の②と対応することはすでに述べた。［9］のⓑでは原理(2)を起点に形而上学内の原理関係、問題群関係を整理したのに対して、ここでは

原理⑴を起点に［9］の②をまとめている。原理⑴は自然学の問題でもあるので、形而上学内のものとは言い難い（原理⑴は自然学の問題でありかつ形而上学の原理である）。それゆえまず形而上学で原理⑴の原理となる原理⑵（これは形而上学における問題でもあるので、原理⑵は形而上学の原理でありかつ形而上学の問題である）を検討し（［9］のⓑ、［10］のㇿで原理⑴に議論を移しているのである。文章中「形而上学の問題である原理（原理⑵）」という表現は以上の構造を反映する。それとともに原理⑵は形而上学における問題でもあるので形而上学内で原理⑵を導出するためのさらなる原理⑶が必要である。このとき原理⑴は原理⑶にならない。これは循環を避けるためではなく、［9］のⓑの議論をもとにする。註37を見ていただきたい。［9］のⓑから原理⑴は（原理⑵を導出する）原理⑶とならないことが引き出せるはずである。そうではなく原理⑴は「別の問題群の原理となる」。ここで「別の問題群」というのは原理⑶が導出する問題群（＝原理⑵）とは「別の問題群」ということである。これは註37で形而上学問題群⑶としたものと同じである。

一見すると［10］のㇷは独立して論じられているように見えるが、既に説明したように［9］のⓑに基づく。言い換えると［9］のⓑにおける原理の構造を前提として［10］のㇷの原理に関する言説が成立していると考えてよい。註35で述べたように、［9］［10］のもとになる *Burhān* II.9で提示される原理の構造は［10］と同じである。つまり、［9］のⓑを形而上学的に成立させることが［10］を導き、ひいては *Burhān* II.9で述べられるものが確証されていくという構造がここにある。これを概念図式で整理するなら、*Burhān* II.9での提示→［9］のⓑでの形而上学的再構成→［10］のㇷでの *Burhān* II.9に沿ったかたちでの整理→*Burhān* II.9の確証、といった具合になろう。

前段で描いた図式には、論理学と形而上学の二学間の原理のやりとりそのものが現れていると考えられる。これが循環でないことは［9］のⓒや［10］のㇽで述べられる事実の論証と原理の論証の別を使うことで説明できよう。*Burhān* II.9、［9］、［10］の内容は自然学や数学と形而上学の間の関係を述べるのだが、構造上は、論じられる内容と相似する論理学と形而上学の関係を有するのである。

（43）底本の taḥṣīl mabdaʾin をIに従って taḥaṣṣul mubtadaʾin と読む。また底本の illā をA、B、I、Marmura に従って lā と読む。

（44）以下に列挙されている論点のうち、必然的存在者については *Ilāhiyāt* I.6で総括的に論じられる。また第一原理とその属性については *Ilāhiyāt* VIIIで、第一原理からの万物の発出とその秩序については *Ilāhiyāt* IXで、詳細な議論が展開されている。

（45）原語は istidlāl. 第一巻第一章［11］に dalīl（証示するもの）という語がある。istidlāl はそうした「証示するもの」、あるいは証拠を用いた推論のことを指す。しかし、*Burhān* I.7では dalīl が事実の推論の一種とされ、推論そのものを指す語として用いられるなど、dalīl の用法は不安定である。dalīl を推論とするなら、istidlāl は dalīl と同義となる。詳細は第一巻第一章註41を見よ。

（46）「原因から結果へと進む論証の道」の裏側には無論「結果から原因へと進む論証の道」がある。この二つの道行を説明しておきたい。論証は事実の論証であれ、根拠の論証であれ、説明原理としては中項が結論（説明）の原因になる。だが、説明原理としての原因と存在原理としての原因は範疇が異なり、事実の論証と根拠の論証ともに中項が結論の存在原理となるわけではない。中項が結論（結果）の存在原理としての原因となり、その結論が中項の存在としての結果となるものが根拠の論証であり、中項が結論の存在原理としての原因とならないものが事実の論証である。第一巻第一章註41で取り上げたように事実の論証の中には中項が結論の存在原理とならないものの、結論が中項の存在原理としての原因となるものがあり、それが事実の論証のなかでも特に dalīl（証左）と呼ばれる。この論証形態はちょうど根拠の論証の逆方向の論証となる。本段落前半に「感覚的な事物からの推論」とあるのがそれにあたる（註45）。

「結果から原因へと進む論証の道」とは事実の論証の一種である dalīl を用いて、存在に関して結果から原因を連続的に引き出していくことである。ごく単純化に図にすると以下のごとくになる。

結果① $\xrightarrow{dalīl(1)}$ 原因①（＝結果②）$\xrightarrow{dalīl(2)}$ 原因②（＝結果③）$\xrightarrow{dalīl(3)}$ 原因③……

このようなかたちで第一原因（第一原理）に到達することは原理的に不可能ではない（この過程にもさまざまな問題があるのだが、ここでは取り上げない）。事実、この種の論法は神（あるいは第一動者）の存在証明に使用されてきた（［6］にもその言及がある。註22も併せて参照されたい）。問題はその過程の逆、本文で言及される「原因から結果へと進む論証の道」である。上記の過程をそのまま逆行すればいいと思われるかもしれないが、そうではない。上記の過程は万物

のほんの一事例の原因をさかのぼり一なる原因・原理に辿りつく。これを逆行しても一なる原因・原理から万物のほんの一事例にしか辿りつかない。それ以外のほとんど無限の万物の存在の原因はどのようにすれば確定するのか。dalīl を連続的に使用して得られるのは、万物のうちの一 ⟶ 第一原因・原理であって、それを逆行しても「原因から結果へと進む論証の道」が本当に行いたい、第一原因・原理 ⟶ 万物、とはならないのである。「たかだか有限個」という言葉があるが、万物が無限に近い数のものであれば、人間にはほぼ「原因から結果へと進む論証の道」を辿ることができない。

以上が原因から結果へと進む論証の道を詳細な仕方で辿れないことのごく大まかな意味合いである。次善の策としてイブン・スィーナーが挙げるのは「存在者の階梯のいくつかの群について」原因から結果へと進む論証の道を辿ることである。「存在者の階梯のいくつかの群」(baʿḍ jumal marātib al-mawjūdāt) が何を意味するか、さまざまに考えられるが、二つほど可能性を挙げておきたい。イブン・スィーナーがこうした群によって、⑴それぞれ複数ある、知性、霊魂、天体（物体）を知性群 (jumla)、霊魂群、天体（物体）群に分けることを想定していると考えるか、⑵ある知性およびそれに帰属する霊魂、天体（物体）を一群として、そうした三つ組からなる複数の群を想定していると考えるかである。知性、霊魂、天体についての概括的な説明は註47にある。

（47）第一原理から発出する万物の秩序について附言しておく。絶対的一者たる第一原理から非質料的な実体である第一知性が発出し、そこから段階的に第九知性（能動知性）までの垂直的秩序が生じる。さらにそれぞれの知性から宇宙霊魂と諸天圏（地球を中心とする同心円運動をなす）が発出し天上界を形成する。これに対して月の天圏よりも下の世界、すなわち月下界（地上界）においては、自然界の種的秩序は維持されるものの、個物としての存在者は絶えず生成消滅を繰り返している。こうした多様な世界にあって人間はその霊魂（知性）において不滅性に与る可能性を秘めていると考えられるが（そこにこそ哲学の目的がある）、その知的能力が及ぶ範囲は極めて限定的であり、天上界の秩序や自然界の法則性の概括的理解を超えて神的秩序の詳細を把握することは不可能である。この箇所でも、そうした人間の知的能力の脆弱さが率直に告白されていると見ることができよう。

（48）B および Narāqī により fī mā baʿda al-ṭabīʿah と、底本の読みに fī を挿入した。

（49）原文は jumlat al-shayʾ al-ḥādith ʿan al-māddah al-jusmāniyah wa-tilka al-qūwah wa-al-aʿrāḍ. 四つの解釈の可能性がある。①ʿan に物体的質料と能力と附帯性をかけて「物体的質料と能力と付帯性から生成するものの全体」とする、②ʿan に物体的質料のみをかけて「物体的質料から生成するものの全体と能力と附帯性」とする、③ʿan に物体的質料と能力をかけて「物体的質料と能力から生成するものの全体と附帯性」とする、④ʿan に物体的質料と能力をかけ「物体的質料および能力から生成するものと附帯性を合わせた全体」とする。ここでは④の解釈を採用した。

（50）*Samāʿ Ṭabīʿī* I. 7 に「自然をもつものとは、それ自身の中にこのような原理をもつものであり、その自然本性（ṭabīʿa）に基づいて運動する物体のことである」(p. 38, ll. 7f.) とある。

（51）原文は al-jirm al-maḥsūs bi-mā la-hu min al-khawāṣṣ wa-al-aʿrāḍ. 本文では「それが有する特性および附帯性によって感覚される物体」としたが、「特性および附帯性を伴った可感的物体」と訳すことも可能である。その違いは、前者が bi-mā の bi を maḥsūsa にかけるのに対して、後者は maḥsūsa にかけず、bi を随伴関係の意味にとることにある。

（52）「数は自然の外にも存在するので、存在に関して自然にけっして依拠してしない」ことは第一巻第二章［6］に少しかたちを変えて「数は、感覚対象にある場合と、感覚対象以外のものにある場合とがある。したがって数である限りにおける数は感覚対象と結びついていない。したがって数である限りにおける数は感覚対象と結びついていない」とある。第一巻第二章［6］では、この記述から、感覚対象と結びつかない数である限りの数が形而上学で探究されることが導かれたが、ここでは数の学（算術学）もまた「自然の後にあるもの」の学ではないか――これは形而上学のみが「自然の後にあるもの」の学ではないという主張になる――というアポリアの前提として用いられる。［16］で「数に関して言えば、懐疑はより解消しがたく、一見すると、数［を探求する］学は「自然の後のもの」の学であるように思われる」と言われるのは、第一巻第二章で形而上学確立に利用された前提が、今度は形而上学（が「自然の後にあるもの」の学を占有する）ことへのアポリアの前提とされるという事態が多分に係わっている。以降、［16］～［20］ではここで提起されるアポリアを解消しつつ、どのように形

而上学と算術学をそれぞれに規定していくのかが議論の中心となる。裏を返せば、第三章［16］～［20］は第一巻第二章［6］で積み残した課題（形而上学と算術学の弁別）を遂行する役割も担っている。

（53）Cは ʿilm mā qabla al-ṭabīʿah とするが、多くの写本で ʿilm mā baʿda al-ṭabīʿah とされるので、それに従う。なお Narāqī も baʿda の読みを採用するが、注で当時 qabla とする写本があったことを示唆している。同段落の直前に「自然の前に」（qabla al-ṭabīʿah）があり、前段落［13］でも形而上学は「自然の後のもの」に関する学というよりも「自然の前のもの」の学だと述べられることから、baʿda の読みは不自然にみえる。しかし［16］冒頭近くで「一見すると、数の学は「自然の後のもの」の学であるように思われる」があり、意味的にも baʿda で読むことが十分可能である。

（54）幾何学の下位には天文学、光学、測地学などがあり、それぞれ特定の図形を対象とする。たとえば天文学は天体の運動が描く空間を、光学は眼と視覚対象との間に想定される空間を、測地学は地面を対象としてその様態を探究する。幾何学の下位部門については、註26を見よ。

（55）「～に伴う附帯性」の原語は al-aʿrāḍ al-lāzimah. この語がもつ意味合いについては第一巻第二章註25を見よ。

（56）量の二義については第一巻第二章［7］に言及がある。論理学と自然学では、それぞれ *Maqūlāt* III. 4 および *Samāʿ Ṭabīʿī* I. 2 に量の二義に関する記述がある。詳細は第一巻第二章註22を参照のこと。

（57）Cは yuʿadd とするが、Anawati により baʿda あるいは buʿd と訂正されている。Iに従って buʿd（延長）とした。

（58）「神的学」の原語は al-ʿilm al-ilāhī. 第一巻第一章［6］［7］および第一巻第二章［18］で ʿilm ilahī が言及される。第一巻第二章註64を参照。

（59）［16］の議論で用いられていた「数の学」（ʿilm al-ʿadad）とここで用いられる「算術学」（ʿilm al-ḥisāb）とを比較すれば、前者の方がより広範な領域を示唆しているようにもとれるが、今の文脈ではその差異は無視して構わない。

（60）「どの面から見ても数と言える」数、すなわち数そのものは形而上学で扱われ、*Ilāhiyāt* III. 5 で論じられる。「後ほど明らかになることであるが」は、*Ilāhiyāt* III. 5 を指すと思われる。

（61）評価能力（wahm）は人間の内部五感覚のうちの一つ。第一巻第二章［5］に言及がある。第一巻第一章註24および第一巻第二章註20を参照されたい。

（62）底本の yaqṣānは誤植であろう。Marmura および B、Iに従って nuqṣān と訂正する。

（63）離在実体である天上界の知性や霊魂の数は定まっており、増減を受け容れることはありえない。天上界の知性や霊魂については註23および註25を参照。

（64）底本の yajib を B、I、Narāqī に従って yajūz と読む。

（65）*Ilāhiyāt* III. 5 で詳述される。

アラビア語語根索引

この索引はこれまで訳出した『治癒』形而上学アラビア語テクスト（第一巻第一章〜第三章）に出現する重要語彙をアラビア語の語根により配列したものである。それぞれの語根の下にテクスト中に出現する語形を挙げ、対応する訳語を添えた。出典はテクストCの頁数と行数で示した。なおCを変更した場合は、見出しを変更後の語とした上で、カッコ内でC記載の語を記し、emend. 以下で変更後の語を表示した。（例）waḍ‘…… 「仮定」19.18（waṣf $\overset{emend.}{\longrightarrow}$ waḍ‘）

’-kh-l – ukhrawī「来世の」17.9

’-ṣ-l – uṣūl「原則」6.9

’-l-f – mu’allaf「結合体」10.7

’-l-h – Allāh「神」5.17, 15.12, 15.13, 23.5
– al-ilāh「神」4.16, 6.1, 6.8, 6.19
– ilāhī, ilāhīyah「形而上学、神的の、形而上学の」3.3, 4.8, 4.14, 4.15, 5.2, 23.4

’-m-r – fī nafs ’umūr「事柄そのものに即して言えば」21.1

’-m-l – ta’ammul「考察」6.9

’-n-n – (burhān) anna「事実（の論証）」20.9
– annīyah「いかにあるか、存在」3.7, 5.17, 7.4, 13.12

’-y-s – ma’yūs「説明不可能な」6.11, 6.12

b-ḥ-th – baḥatha「探究する」4.14, 4.15, 5.16, 5.19, 6.8, 7.17, 8.1, 14.10, 14.11, 14.14, 14.15, 14.17, 14.18, 15.3, 15.3, 15.7, 15.16, 15.17, 16.11, 16.14
– baḥth「探究」4.9, 6.12, 6.14, 6.15, 6.17, 6.18, 7.2, 8.3, 8.18, 10.12, 11.3, 11.6, 12.9, 14.2, 14.4, 16.7, 16.10, 16.11
– mabḥūth「探究対象」4.12, 8.17, 16.6

b-d-’ – mabda’「原理」4.3, 4.16, 5.4, 5.8, 7.5, 8.14, 10.7, 11.18, 14.2, 14.3, 14.4, 14.8, 14.9, 14.10,,14.11, 14.11, 14.12, 14.13, 14.18, 15.1, 15.2, 15.6, 15.8, 15.15, 18.12, 18.13, 18.16, 18.17, 19.10, 19.11, 19.12, 19.16, 19.17, 20.1, 20.3, 20.4, 20.5, 20.7, 20.8, 20.12, 20.13, 20.14, 20.15, 20.16, 21.2, 21.3, 21.4, 21.5, 21.7, 21.13, 22.12

b-r-’ – al-Bāri’「創造主」19.5

b-r-h-n – barhana「論証する」14.12, 14.13
– burhina「論証される」19.11
– burhān「論証」5.4, 19.16, 19.17, 19.18, 20.1
– burhān anna「事実の論証」20.9
– burhān lima「根拠（理由）の論証」20.10
– *Burhān* 「『論証』（論理学の）」5.3, 19.14
– burhānī「論証の」21.7

b-‘-d – bu‘d「延長」11.14

b-y-n – bayān「証明、解明、説明」19.13, 20.13, 20.18, 23.10
– bayān dawrī「循環論法、循環証明」19.12, 20.17
– bayyin bi-nafsihi, bayyina bi-nafsihā「自明の」6.10, 6.11, 8.14, 8.15, 20.5, 20.13

th-b-t – thabata「承認する」8.6
– ithbāt「確定・確立」6.8, 6.16, 8.5, 8.6, 8.12, 10.12, 13.10, 13.11, 14.2, 21.3

j-d-l – jadal「弁証論」16.13
– jadalī「弁証論的」16.15, 16.17, 16.18

j-r-b – tajribah「経験」8.10

j-r-d – jarrada「抽象する」11.6, 11.8
– mujarrad「抽象された、離在した」4.11, 10.10, 10.11, 10.12, 10.13, 23.13

j-r-m – jirm「物体」21.15, 21.16

j-z-’ – juz’「部分」9.2, 9.4, 14.14
– juz’ī, juz’īyah「個物、個別的」7.18, 9.3, 13.4, 13.17, 14.11, 14.18, 15.2, 15.3, 15.8, 16.15, 16.17, 18.13, 18.15
– juz‘īyāt「下位部門」19.8

j-s-m – jism「物体」4.9, 6.19, 10.6, 11.3, 11.5, 11.15, 11.16, 11.18, 12.3, 22.16, 23.17
– jismānī (or jusmānī)「物体的」11.2, 21.13
– mujassam 立体 22.9

j-l-l – ajall「より高次な」17.15, 18.1, 18.4

j-m-‘ – ijtama‘a「結合する」24.4

j-m-l – jumlah 「集合体・全体」7.13, 9.2, 9.3
– jumlī (or jumalī)「集合的」9.2

j-h-l – majhūl「未知のもの」11.1

j-w-h-r – jawhar「実体」10.7, 11.3, 11.4, 11.10, 11.11, 12.13, 13.14
– tajawhur「実体となること」12.3

ḥ-d-d – taḥaddada「定義を行う」12.15
– ḥadd 「定義」4.12, 4.14, 5.11, 12.4, 13.2, 15.13, 15.14
– taḥdīd「定義」11.8
– maḥdūd「限定された」11.16
– mutaḥaddid bi-「定義の中に～を含みこむ」16.9, 16.10

ḥ-d-th – ḥadatha「生じる」15.5
– ḥādith「生成するもの／生成する」8.14, 21.13

ḥ-r-k – ḥarakah「運動」4.13, 7.1, 10.8, 16.5, 21.13
– muḥarrik「動かすもの」19.4
– muḥarrik awwal「第一動者」19.4
– mutaḥarrik「動くもの」4.9, 14.17, 19.3, 19.4

ḥ-s-s – ḥiss「感覚」8.8, 8.10, 20.4
– maḥsūs「感覚対象／感覚される」11.7, 11.8, 11.11, 11.12, 11.13, 12.1, 12.2, 12.10, 12.11, 21.3, 21.16

ḥ-s-b – ḥisāb「算術学」19.8, 22.4, 22.6, 23.10, 24.1, 24.5

ḥ-ṣ-l – ḥaṣala「生ずる」24.1
– taḥṣīl「達成」17.9, 21.2

ḥ-q-q – ḥaqqaqa「吟味する」5.5
– taḥaqīq「吟味／確立」5.5, 17.14
– taḥaqquq「確定／確立」17.12, 18.13, 18.17
– muḥaqqiq「確定的な」23.10
– bi-al-ḥaqīqah「実際のところ／真の／真の意味での」5.2, 5.7, 5.8, 7.6, 20.1, 22.15

ḥ-k-m – ḥikmah「叡智」5.8, 5.9, 5.11, 5.12, 5.14, 15.11
– ḥikmī「形而上学的・叡智的」3.10, 6.7
– ḥakīm「叡智ある者」16.19, 16.20

ḥ-w-l – ḥāl, ḥālah「状態・様態」4.1, 4.12, 5.19, 6.18 , 8.17, 10.13, 11.3, 12.12, 13.10,15.3, 15.7, 16.6, 16.11, 21.17, 24.4, 24.6
– istiḥālah「不可能」13.11

kh-d-m – khidmah「奉仕」18.9, 18.10
– khādim「従僕（奉仕する者）」18.10, 18.11, 18.14
– makhdūm「主人（奉仕される者）」18.10, 18.14

kh-s-s – akhass「より卑賤な」18.10

kh-ṣ-ṣ – khaṣṣa「固有である」5.15, 7.12, 9.1, 11.6
– takhaṣṣaṣa「特定されている」13.19
– ikhtaṣṣa「特定されている」13.6
– takhṣīṣ「特殊化」15.4, 15.5, 15.6
– khāṣṣah「特性」21.16
– khāṣṣ「固有の／固有な」7.18, 8.2, 8.3, 10.16, 13.3, 14.6, 15.1, 16.17, 18.6, 18.12
– mukhaṣṣiṣ「限定的」17.13, 17.15, 18.1, 18.9

kh-ṭ-ṭ – khaṭṭ「線」11.16, 22.9, 22.16

kh-l-ṭ – khālaṭa「混在する」16.1
– mukhālaṭah「混在」7.1, 16.1

kh-l-f – mukhālif「（同の対義語としての）異」13.1

kh-l-q – akhlāq「道徳的気質」4.6
– khulqī, khulqīyah「倫理（学）」6.6, 10.9, 13.9, 19.8

kh-y-r – khayr「善」17.5, 17.6, 17.7
– ikhtiyārī「選択」8.11

d-b-r – tadbīr「経綸」19.5

d-ḍ-ḍ – diḍḍ「反対」13.1

d-l-l – dalla「提示する」10.4, 20.16
– dalīl「証示」6.12
– istidlāl「推論」21.3

d-w-r – (bayān) dawrī「循環の（論法・証明）」19.12, 20.17

d-w-n – dūna「低次の」18.5

dh-h-n – dhihn「精神」10.10, 10.11

dh-w – dhāt「自身／そのもの」5.5, 12.10, 13.4, 18.6, 24.5, 24.8
– bi-al-dhāt「それ自体として／それ自体に即して」4.10, 4.11, 12.2, 22.3
– bi-dhāti-hi「それ自体によって／それ自体に」17.6, 22.2
– dhū「～を持つ」4.12, 8.6

r-'-s – riyāsah「統御」18.7
– ra'īs「支配する者」18.14
– mar'ūs「支配される者」18.14

r-'-y – ra'y「見解」4.2

r-t-b – martabah「序列／階梯」17.3, 19.1, 21.8, 21.10
– tartīb「配列・秩序」19.6, 21.6

r-w-ḥ – rūḥānī「霊的な」19.6

r-w-ḍ – riyāḍī, riyāḍīyah「数学´ 数学の」3.9, 6.6, 10.10, 10.15, 15.6, 16.11, 19.1, 19.5, 19.8, 20.9, 22.4

z-m-n – zamān「時間」19.3

z-y-d – ziyādah「増加」23.15, 23.17

s-’-l – mas’alah「問題」15.1, 15.7, 16.16, 19.11, 19.16, 19.17, 19.18, 20.7, 20.12, 20.14, 20.15

s-b-b – sabab「原因」4.15, 4.16, 5.10, 7.8, 7.10, 7.11, 7.14, 7.15, 7.18, 8.5, 8.6, 8.7, 8.8, 8.9, 8.12, 9.6, 9.9, 14.14, 14.15, 15.7, 15.12, 15.13, 16.1, 17.6
– sabab awwal「第一の原因」14.16

s-ṭ-ḥ – saṭḥ「面」11.16, 12.4, 22.9, 22.16

s-‘-d – sa‘ādah「幸福」17.9

s-f-s-ṭ – sufisṭah「詭弁論」16.13
– sūfisṭā’ī「詭弁論の´ 詭弁論者の」16.15, 16.18

s-k-n – sukūn「静止」10.8, 16.5, 21.13
– sākin「静止している」4.9

s-l-m – taslīm「受容・承認」6.12, 13.12
– musallam「受け容れられている」5.4, 5.19, 6.1, 6.3, 6.4, 19.2

s-m – ism「名・名称」17.3, 18.6, 21.12, 22.14, 23.9

s-m-y – tasmiyah「呼称」23.8

s-w-s – siyāsah「政治学」19.8
– siyāsīyah「政治（学）の」6.6

s-w-y – musāwin「同等な」18.5

sh-h-r – mashhūr「周知の事柄」8.13

sh-r-r – sharr「悪」17.5, 17.7

sh-r-ṭ – sharṭ「条件」13.13

sh-r-f – ashraf「より高貴な´ 最も高貴な」18.9, 23.4, 23.6, 23.7

sh-r-k – ishtaraka「共有する」17.8
– yashtarik「共通する」14.12, 16.4
– sharikah「共通点」16.3
– ishtirāk「同名異議」22.14
– mushtarik「共通の」12.12, 12.16, 13.6, 18.13
– mushtarak「共通する´ 共有」13.8, 14.12, 23.9
– (ism) mushtarak「多義的」11.14

sh-k-l – shakl「形」12.3, 12.5

sh-h-d – shāhada「目撃する」21.17, 22.1

ṣ-ḥ-ḥ – taṣḥīḥ「確証」5.8

ṣ-d-q – taṣdīqī「判断（知）」4.1, 4.5

ṣ-n-‘ – ṣinā‘ah「学術」5.12, 5.15, 13.9, 15.9, 16.18

ṣ-w-r – ṣūrah「形相」10.8, 22.12
– taṣawwurī「表象（知）」4.1, 4.5
– ṣūrīyah「形相的」11.5

ḍ-r-r – ḍārr「有害なもの」17.5
– ḍarūrī「不可欠である」19.9
– ḍarūratan「必ず」14.14

ṭ-b-b – ṭibb「医学」15.1

ṭ-b-‘ – ṭabī‘ah「自然本性´ 自然」14.5, 19.10, 21.12, 21.15, 22.2, 22.3, 22.5, 22.6, 22.7, 22.10, 23.3, 23.8, 24.1, 24.2
– mā ba‘da al-ṭabī‘ah「自然の後のもの」21.12, 21.17, 23.2, 23.10
– ṭabī‘īyah「自然本性的な」8.11
– ṭabī‘īyah「自然学」3.9, 4.7, 4.9, 6.6, 6.19, 7.3, 8.2
– ṭabī‘ī「自然の」11.15, 11.18, 21.16, 22.1, 22.16, 23.12, 24.4;「自然学´ 自然学的´ 自然学の」4.15, 10.6, 10.9, 13.19, 14.7, 15.1, 15.5, 19.2, 20.5, 20.9

ṭ-b-q – ṭabaqah「位階」19.6

ṭ-l-b – ṭalaba「求める」3.13
– maṭlab「探求の対象・問題」5.17, 8.17, 13.13
– maṭlūb「探求対象」5.4, 6.2, 6.3, 6.4, 6.5, 6.9, 6.10, 8.18, 9.1, 9.10, 15.9

ṭ-l-q – muṭlaq「非限定的´ 端的な」5.14, 7.11, 7.14, 7.16, 8.5, 8.8, 14.11, 17.13, 17.14, 17.16, 18.3, 18.11, 22.11, 22.14, 24.6

ẓ-n-n – ẓanna「憶測する´ 思う」7.7, 7.9, 16.19
– ẓann「憶測」16.18

‘-d-d – ‘adad「数」10.11, 10.12, 10.13, 11.4, 11.12, 22.5, 23.1, 23.9, 23.11, 23.14, 24.1, 24.5, 24.6, 24.8
– isti‘dād「準備態勢」13.18
– ma‘dūd「数えられる」23.18
– musta‘idd「受容しうる」22.11, 22.16

‘-r-ḍ – ‘araḍa「附帯する」4.10, 4.12, 7.15, 10.13, 14.7, 15.2

– ʻaraḍ「附帯性」7.17, 8.2, 8.3, 13.18, 21.14, 21.16, 22.10, 22.12
– ʻāriḍ「附帯的性質／附帯している」4.10, 10.15, 12.3, 12.8, 12.12, 13.3, 13.7, 13.17, 14.4, 14.5, 14.17, 15.8, 15.15, 23.13, 23.14, 24.5, 24.6

ʻ-r-f – taʻarrafa「認識する」21.17
– maʻrifah「知識／知／知ること」5.6, 5.9, 5.10, 7.6, 8.10,15.12, 15.13, 18.15, 18.16, 19.5, 19.6, 23.5, 23.7

ʻ-q-d – iʻtiqād「信念」4.2

ʻ-q-l – ʻaql「知性」3.13, 8.7, 8.14
– ʻaqlī「理性的な／知性的な」11.1, 21.4
– maʻqūl「思惟対象」10.17, 10.18, 11.1

ʻ-l-l – ʻillah「原因」8.12, 20.2, 20.10, 21.7
– ʻillah awwalīyah「第一義的な原因」12.6
– al-ʻillah al-ūlā「第一原因」5.5, 15.10
– ʻillīyah「原因」16.3
– maʻlūl「結果」21.8
– (mawjūd) maʻlūl「結果としての存在者」14.9, 14.15, 14.16, 15.7, 15.8

ʻ-l-q – taʻallaqa「関わる」11.1, 11.2, 12.11, 24.8
– taʻalluq「結びついていること／依拠／依存」16.10, 19.3, 22.5
– ʻalāʾiqah「結びつくもの」15.18
– muta'alliq「結びついている」11.10, 11.13, 12.1, 12.9, 15.16

ʻ-l-m – ʻilm「学」*passim.*
– ʻilm「知」4.1, 4.4, 5.9, 5.10, 8.5, 15.9, 15.11, 15.14
– maʻlūm「(知の) 対象」5.9, 10.18, 15.11
– taʻālīm「数学」19.10
– taʻlīmīyah「数学」4.7, 4.11, 4.16, 8.2, 13.19, 14.7

ʻ-m-m – yaʻumm「包括する」12.14
– ʻāmm「普遍的な」14.6
– ʻumūm「一般性」15.10
– bi-al-ʻumūm「一般性において」22.3

ʻ-m-l – ʻamal「行為」4.1, 4.2, 4.3, 4.5
– ʻamalī, ʻamalīyah「実践的（学）」3.12, 4.4, 4.6, 8.3

ʻ-n-y – maʻnan「概念／内容／意味」3.8, 3.9, 5.6, 7.17, 10.17, 10.18, 11.17, 12.1, 12.9, 12.14, 15.17, 16.8, 16.10, 17.13, 17.16, 18.1, 23.5, 23.9; 「もの・こと」17.6, 17.11, 18.4, 18.5
– ʻināyah「配慮」18.7

ʻ-w-n – maʻūnah「補助」17.11

gh-r-ḍ – gharaḍ「目的」7.15, 10.4, 16.12, 19.5, 21.1

gh-y-y – ghāyah「目的／到達点」17.15, 23.5, 23.6
– ghāʾī「究極の」20.11

gh-y-r – taghayyur「変化」19.3
– mutaghayyir「変化する」21.5

f-r-q – fāraqa「離在する／離れた」4.14 , 6.18, 11.17, 23.8
– iftaraqa「分離する」24.4
– mufāriq「離れた／離在している」4.14, 6.18, 11.17, 22.9, 23.12, 23.15, 23.18

f-s-d – fasād「消滅」19.3

f-ḍ-l – fāḍil「卓越した」15.11, 15.12

f-ʻ-l – fiʻl「行為」5.6
– bi-al-fiʻl, bi-fiʻl「現実態において」3.13, 7.18, 12.6, 13.17, 17.9, 19.17
– fāʻil「能動因」7.12

f-l-s-f – falsafah「哲学」3.7, 3.11, 5.7, 5.11, 5.13, 15.9, 20.6
– faylasūf「哲学者」16.16

f-l-k – falak「天圏」19.6

f-n-n – fann「部門」3.3

f-y-d – afāda「与える・供与する」18.5, 20.2, 20.4, 20.9, 20.10
– ifādah「供与」18.7, 18.9, 18.12

f-y-ḍ – ifāḍah「下賜」18.6

q-b-l – qabila「受け容れる」24.6
– qābil「受動因／受け容れうる」7.12, 23.16

q-d-r – miqdār「量」10.10, 10.11, 10.12, 11.4, 11.14, 11.15, 11.17, 12.4, 12.7, 22.11, 22.12, 22.13, 22.14, 22.15, 22.16

q-d-m – yataqaddam「先行する」15.16
– muqaddimah「前提」20.1, 20.7, 20.8, 21.4
– mutaqaddim「先行している」12.2, 15.15, 16.1

q-s-m – inqasama「分割する」24.4

q-ṣ-d – qaṣd「意図」17.10
– maqṣūd「目的とされる」18.15, 18.16; 「目的」23.7

q-ṣ-w – qāṣin「究極的」7.8, 9.6, 9.10, 14.15, 15.13

q-w-l – maqūlah「範疇」12.13, 13.6

q-w-m – qiwām「実態´存立」4.14, 12.1, 12.2, 12.11, 22.10
– muqawwim「存立させる´成り立たせている」11.15, 14.4, 16.1, 16.2, 22.15

q-w-y – qūwah「能力」3.13, 4.4, 4.6, 6.19, 21.12, 21.14;「強さ´力」4.13, 16.17;「可能態」7.18, 13.17
– bi-al-qūwah, bi-qūwatin「可能態において」19.17, 23.17

k-th-r – kathīr「多」13.1, 13.17
– mutakaththir「多である」21.5

k-l-l – kull「万有´万物」5.10, 21.5, 21.6;「全体」9.2
– kullī「普遍（的）」7.18, 9.2, 9.3, 13.17, 21.4

k-m-m – kamm「量」4.11, 4.12, 13.14, 22.14
– kammīyah「量」11.15, 12.13
– mutakammim「量をもつ」14.17

k-m-l – kamāl「完全性」18.6; 完成「17.9」;「完成態」23.7
– istikmāl「完成態」12.4

k-w-n – kawn「生成」19.3
– makān「場所」19.3

k-y-f – kayf「質」13.14

l-’-k – mal’ak「天使」19.6

l-ḥ-q – laḥiqa「附随する」9.7, 10.16, 13.13. 14.6
– lāḥiqah「附随するもの・こと」14.2

l-z-m – lazima「附随する」12.5, 13.14
– laāzim「附随している」12.3, 22.10

l-f-ẓ – lafẓ「語彙」18.7

l-m – (burhān) lima「根拠・理由（の論証）」20.10
– limīyah「根拠（なぜそのようであるか）」20.16

māhīyah – māhīyah「何であるか´本質」13.9, 13.11, 13.12, 18.13

m-d-d – māddah「質料」4.11, 4.13, 4.14, 6.19, 7.1, 10.10, 10.11, 10.12, 10.13, 11.1, 11.2, 11.5, 11.10, 11.17, 12.3, 12.5, 12.6, 12.9, 15.15, 15.16, 15.17, 15.18, 16.1, 16.2, 16.4, 16.5, 16.6, 16.8, 16.9, 16.10, 16.11, 21.13, 24.7, 24.8
– māddī「質料的である」24.7

m-s-ḥ – misāḥī「測地学」15.1

m-k-n – imkān「可能」7.19
– mumkin「可能（的）」13.18

m-n-‘ – mumtani‘「不可能な」14.5

mūsīqā – mūsīqā「音楽学」19.8

n-t-j – intāj「導出」20.7, 20.8

n-s-b – nisbah「関係」18.14, 18.15 ;「比」22.11, 22.17, 23.15, 23.17

n-ṭ-q – manṭiq「論理学」5.3, 12.10, 16.18
– manṭiqī, manṭiqīyah「論理学（の）」3.9, 6.6, 10.17, 22.13

n-ẓ-r – naẓara「考察する」5.16, 7.7, 7.10, 22.4, 24.1
– naẓar「考察」6.11, 7.10, 7.12, 7.14, 7.15, 9.2, 9.3, 9.4, 9.6, 9.9, 10.15, 12.7, 12.8, 14.3, 16.10, 22.8, 24.2, 24.5, 24.8
– naẓarīyah「理論的（学）」3.12, 3.13, 4.4, 4.7

n-ẓ-m – niẓām「秩序」19.6

n-f-s – nafs「霊魂」3.13, 8.10, 12.15, 17.9;「自身´それ自体」14.9, 19.13, 20.18, 21.6
– fī nafsi-hi, fī anfusi-hā「それ自体として´それ自体に関して言うと」8.1, 21.9
– $\overset{see}{\downarrow}$ ’-m-r; b-y-n

n-f-‘ – nafa‘a「有益である」18.1, 18.2, 18.10, 18.11
– manfa‘ah「有益性」17.3, 17.4, 17.6, 17.8, 17.10, 17.11, 17.13, 17.16, 18.1, 18.3, 18.9, 18.11, 18.12, 18.14
– nāfi‘「有益な´有益なもの」17.5, 17.6, 17.14, 17.15, 19.9

n-q-ṣ – nuqṣān「減少」23.15

n-h-y – mutanāhin「有限な´限定された」12.3, 12.4

n-w-‘ – naw‘「種」4.13, 13.14, 15.4, 18.11, 18.12

h-n-d-s – handasah「幾何学」15.2, 19.8, 22.5, 22.7, 22.8, 22.15
– handasī「幾何学的」8.15

hayūlā – hayūlā「質料」10.8

w-j-b – wujūb「必然」7.19
– wājib「必然（的）」13.18
– wājib al-wujūd「必然的存在者」21.4

w-j-d – wujida「存在する」22.6, 23.12
– wujūd「存在」4.15, 5.19, 6.1, 6.12, 6.14, 6.15, 6.17, 8.6, 8.7, 8.12, 8.18, 9.1, 11.1, 11.4, 11.6, 11.8, 11.9, 11.10, 11.18, 12.7, 12.8, 12.14, 13.3, 13.4, 14.12, 14.13, 14.15, 15.10, 15.14, 15.15, 15.17, 16.2, 16.4, 16.5, 16.6, 16.8, 18.16, 20.4, 20.16, 21.17, 22.1, 22.5,

23.14

– mawjūd「存在者／存在する」7.8, 7.10, 8.11, 9.7, 9.8, 10.6, 11.3, 11.4, 12.4, 12.5, 12.9, 12.13, 13.7, 13.8, 13.12, 13.13, 13.14, 13.18, 14.1, 14.2, 14.4, 14.5, 14.6, 14.7, 14.8, 14.9, 14.15, 14.16, 14.17, 14.18, 15.3, 15.4, 15.7, 15.8, 15.14, 21.8, 23.14

w-ḥ-d – ittaḥada「合一する」24.4
– wāḥid「一者」7.1;「一」12.16, 13.17
– waḥdah「一」15.11, 16.3

w-ṣ-f – ṣifah「属性」5.6, 5.11, 5.14, 6.15, 13.4, 13.5, 24.3

w-ṣ-l – muttaṣil「連続の」11.15

w-ḍ-ʿ – wuḍiʿa「想定される」23.16
– waḍʿ「措定」10.14, 10.16;「仮定」19.18（waṣf $\overset{emend.}{\longrightarrow}$ waḍʿ）;「想定」23.13
– mawḍūʿ「主題」3.7, 4.9, 4.11, 5.2, 5.4, 5.5, 5.15, 5.16, 5.18, 6.1, 6.2, 6.16, 7.7, 7.8, 8.17, 9.5, 9.8, 9.9, 10.3, 10.4, 10.6, 10.8, 10.10, 10.17, 12.10, 12.12, 13.3, 13.9, 13.11, 13.12, 14.1, 14.3, 14.4, 15.5, 15.5, 22.9, 22.10, 22.15, 23.11;「想定される」23.8, 23.15

w-f-q – muwāfiq「（異の対義語としての）同」13.1

w-h-m – wahm「評価能力」23.13, 23.18, 24.3
– tawahhum「想定」11.8
– wahmī「評価能力の」24.7

y-q-n – yaqīn「確信，確実性」15.12, 18.12, 20.2

日本語索引

この索引は『治癒』形而上学の既訳部分（第一巻第一章〜第三章）に出現する重要語彙を示したものである。それぞれの語彙に対応するアラビア語をカッコ内に挙げ，出典をテクストCの頁数と行数で示した。なおCを変更した場合は，カッコ内でC記載の語を記し，emend. 以下で変更後の語を表示した。（例）仮定（waṣf $\overset{emend.}{\longrightarrow}$ waḍʿ）

あ　行

悪 (sharr) 17.5

医学 (ṭibb) 15.1

一 (wāḥid) 12.16, 13.17; (waḥdah) 15.11, 16.3
— 一者 (wāḥid) 7.1

意図 (qaṣd) 17.10

意味 (maʿnan) 17.13, 17.16, 18.1, 23.5, 23.9

動かすもの (muḥarrik) 19.4
— 第一動者 (muḥarrik awwal) 19.4

動くもの (mutaḥarrik) 4.9, 14.17, 19.3, 19.4

運動 (ḥarakah) 4.13, 7.1, 10.8, 16.5, 21.13

叡智 (ḥikmah) 5.8, 5.9, 5.11, 5.14, 15.11
— 叡知的 (ḥikmī) 6.7

エウクレイデス (Ūqlīdus) 8.15

延長 (buʿd) 11.14

憶測 (ẓann) 16.18

音楽学 (mūsīqā) 19.8

か　行

階梯 (martabah) 21.8

概念 (maʿnan) 5.6, 7.17, 10.17, 10.18

学 (ʿilm) *passim.*

学術 (ṣināʿah) 5.12, 5.15, 13.9, 15.9, 16.18

確信・確実性 (yaqīn) 15.12, 18.12, 20.2

確定・確立 (ithbāt) 6.16, 10.12, 13.10, 13.11, 14.2, 21.3

下腸 (ifāḍah) 18.6

数 (‘adad) 10.11, 10.12, 10.13, 11.4, 11.12, , 22.5, 23.1, 23.9, 23.11, 23.14, 24.1, 24.5, 24.6, 24.8

形 (shakl) 12.3, 12.5

仮定 (waṣf $\overset{emend.}{\longrightarrow}$ waḍ‘) 19.18

可能 (imkān) 7.19
— 可能（的） (mumkin) 13.18
— 可能態 (qūwah) 7.18, 13.17
— 可能態において (bi-qūwah/bi-al-qūwah) 19.17, 23.17

神 (Allāh) 3.1, 3.2, 3.8, 3.10, 5.17. 15.12, 15.13; (al-ilāh) 4.16, 6.1, 6.8, 6.19, 23.5

感覚 (ḥiss) 8.8, 8.10, 20.4

感覚対象 (maḥsūs) 11.7, 11.8, 11.11, 11.12, 11.13, 12.1, 12.2, 12.10, 12.11

関係 (nisbah) 18.14, 18.15

完成態 (istikmāl) 12.4

幾何学 (handasah/handasīyah) 8.15, 15.2, 19.8, 22.5, 22.7, 22.8, 22.15

詭弁論 (safsaṭah) 16.13
— 詭弁論の´詭弁論者の (sūfisṭā’ī) 16.15, 16.18

経験 (tajribah) 8.10

形而上学 (ilāhī/ilāhīyah) 3.2, 4.7, 4.14, 5.2; (ḥikmī) 3.10

形相 (ṣūrah) 10.8, 22.12

経編 (tadbīr) 19.5

結果 (ma‘lūl) 21.8

結合する (ijtama‘a) 24.4

結合体 (mu’allaf) 10.7

供与 (ifādah) 18.7, 18.9, 18.12

原因 (sabab) 7.10, 7.15, 7.18, 8.8, 8.9, 9.6, 15.7, 15.12, 17.6; (‘illah) 8.12, 20.2, 20.10, 20.11, 21.7; (‘illīyah) 16.3
— 究極的原因 (sabab aqṣā) 7.8, 9.6, 9.9, 14.14, 14.15, 15.13
— 諸原因の原因 (sabab al-asbab) 4.16
— 第一原因 (sabab awwal) 4.15, 5.10, 14.16; (al-‘illah al-ūlā) 5.5, 15.10
— 端的に捉えられた原因 (sabab muṭlaq) 7.11, 7.14, 7.15, 8.5, 8.6, 8.7

見解 (ra’y) 4.2

現実態 (fi‘l) 3.13, 7.18, 12.6, 13.17
— 現実態において (bi-fi‘l/bi-al-fi‘l) 17.9, 19.17

減少 (nuqṣān) 23.15

原則 (uṣūl) 6.9

限定的 (mukhaṣṣiṣ) 17.13, 17.15, 18.1, 18.9

原理 (mabda’) 4.16, 5.4, 5.8, 10.7, 11.18, 14.2, 14.3, 14.4, 14.8, 14.9, 14.10, 14.11, 14.11, 14.12, 14.13, 14.18, 15.1, 15.2, 15.6, 15.8, 15.15, 18.12, 18.13, 18.16, 18.17, 19.10, 19.11, 19.12, 19.16, 19.17, 20.1, 20.3, 20.4, 20.5, 20.7, 20.8, 20.12, 20.13, 20.14, 20.15, 20.16, 21.3, 21.4, 21.5, 21.7, 21.13, 22.12

語彙 (lafẓ) 18.7

行為 (‘amal) 4.1, 4.2, 4.3, 4.5; (fi‘l) 5.6

合一する (ittaḥada) 24.4

幸福 (sa‘ādah) 17.9
— 来世の幸福 (sa‘ādah ukhrawīyah) 17.9

個物・個別的 (juz’ī/juz’īyah) 7.18, 9.3, 13.4, 13.17, 14.11, 14.18, 15.2, 15.3, 15.8, 16.15, 16.17
— 個別的諸学 (‘ulūm juz’īyah) 18.13, 18.15

根拠（なぜそのようであるか） (limmīyah) 20.16
— 根拠（理由）の論証 (burhān al-lima/burhān lima) 20.10

さ　行

算術学 (ḥisāb) 19.8, 22.4, 22.6, 23.10, 24.1, 24.5

思惟対象 (ma‘qūl) 10.17, 10.18, 11.1

時間 (zamān) 19.3

始原 (mabda’) 7.5, 8.14

事実の論証 (burhān anna) 20.9

自然
— 自然学´自然学的 (ṭabī‘ī/ṭabī‘īyah) 3.9, 4.7, 4.9, 4.15, 6.6, 6.19, 7.3, 8.2. 10.6, 10.9, 13.19, 14.7, 15.1, 15.5, 19.1, 19.2, 19.10, 20.5, 20.9, 20.13, 22.12, 22.13
— 自然の後のもの (mā ba‘da ṭabī‘ah) 21.12, 21.17, 23.2, 23.10
— 自然物体 (jirm ṭabī‘ī) 21.15 ; (jism ṭabī‘ī) 22.16
— 自然本性 (ṭabī‘ah) 14.5
— 自然本性的な (ṭabī‘ī) 8.11

質 (kayf) 13.14

実践的（学）(‘amalīyah) 3.12 , 4.4 , 8.3

実体 (jawhar) 10.7, 11.3, 11.4, 11.10, 11.11, 12.13, 13.14

実態´存立 (qiwām) 4.14, 12.1, 12.2, 12.11

質料 (māddah) 4.11, 4.13, 4.14, 6.19, 7.1, 10.10, 10.11, 10.12, 10.13, 11.1, 11.2, 11.5, 11.10, 11.17, 12.3, 12.5, 12.6, 12.9, 15.15, 15.16, 15.17, 15.18, 16.1, 16.2, 16.4, 16.5, 16.6, 16.8, 16.9, 16.10, 16.11, 21.13, 24.7, 24.8; (hayūlā) 10.8, 22.14, 23.17
— 質料的である (māddī) 24.7
— 物体的質料 (māddah jusmānīyah) 21.13

支配する者 (ra'īs) 18.14

種 (naw‘) 4.13, 13.14, 15.4, 18.11, 18.12

集合体´集合的 (jumlah/jumlī [or jumalī]) 9.2

従僕 (khādim) 18.10, 18.11, 18.14

主人 (makhdūm) 18.10, 18.14

主題 (mawḍū‘) 3.7, 4.9, 4.11, 5.2, 5.4, 5.5, 5.15, 5.16, 5.18, 6.2, 6.16, 7.7, 7.8, 8.17, 9.5, 9.8, 9.9, 10.3, 10.4, 10.6, 10.8, 10.10, 10.17, 12.10, 12.12, 13.3, 13.9, 13.11, 13.12, 14.1, 14.3, 14.4, 15.5, 15.5, 22.9, 22.10, 22.15, 23.11; (waḍ‘) 10.14, 10.16

受動因 (qābil) 7.12

循環論法・循環証明 (bayān dawrī) 19.12, 20.17

証示 (dalīl) 6.12

状態・様態 (ḥāl/ ḥālah) 4.1, 4.12 , 5.19 , 8.17, 10.13, 11.3, 12.12, 13.10,15.3, 15.7, 16.6, 16.11, 21.17, 24.4, 24.6

消滅 (fasād) 19.3

序列 (martabah) 17.3, 19.1, 21.10

神的学 (‘ilm ilāhī) 23.4

真の意味での (bi-al-ḥaqīqah) 20.1, 22.15

信念 (i‘tiqād) 4.2

推論 (istidlāl) 21.3

数学 (riyāḍīyah) 3.9 , 6.6, 10.10, 10.15, 15.6, 16.11, 19.1, 19.5, 19.8, 20.9; (ta‘līmī/ta‘līmīyah)4.7, 4.11, 4.16, 8.2, 13.19, 14.7, 19.10
— 数学的 (riyāḍī) 22.4

静止 (sukūn) 10.8, 16.5, 21.13
— 静止している (sākin) 4.9

政治学 (siyāsīyah) 6.6, 19.8

精神 (dhihn) 10.10, 10.11

生成 (kawn) 19.3
— 生成物 (ḥādith) 8.14
— 生成する事物 (shay' ḥādith) 21.13

線 (khaṭṭ) 11.16, 22.9, 22.16

善 (khayr) 17.5, 17.6, 17.7

全体 (kull) 9.2; (jumlah) 9.3

選択 (ikhtiyārīyah) 8.11

前提 (muqaddimah) 20.1, 20.7, 20.8, 21.4

増加 (ziyādah) 23.15, 23.17

創造主 (al-Bāri') 19.5

想定 (tawahhum) 11.8

属性 (ṣifah) 5.6, 5.11, 5.14, 6.15, 13.4, 13.5, 24.3

測地学 (misāḥī) 15.1

存在 (annīyah) 5.17, 7.4, 13.12; (wujūd) 4.15, 4.16, 5.19, 6.1, 6.12, 6.14, 6.15, 6.17, 8.6, 8.7, 8.12, 8.18, 9.1, 11.1, 11.4, 11.6, 11.8, 11.9, 11.10, 11.18, 12.7, 12.8, 12.14, 13.3, 13.4, 14.12, 14.13, 14.15, 15.10, 15.14, 15.15, 15.17, 16.2, 16.4, 16.5, 16.6, 16.8, 18.16, 20.4, 20.16, 21.17, 22.1, 22.5, 23.14
— 存在者 (mawjūd) 7.8, 7.10, 9.7, 9.8, 10.6, 11.3, 11.4, 12.4, 12.5, 12.9, 12.13, 13.7, 13.8, 13.12, 13.13, 13.14, 13.18, 14.1, 14.2, 14.4, 14.5, 14.6, 14.7, 14.8, 14.9, 14.15, 14.16, 14.17, 14.18, 15.3, 15.4, 15.7, 15.8, 15.14, 21.
— 必然的存在者 (wājib al-wujūd) 21.4
— 存在する (wujida) 22.6, 23.12;(mawjūd) 23.14

た　行

多 (kathīr) 13.1, 13.17

第一哲学 ⟶ 哲学

第一動者 ⟶ 動かすもの

多義的 (mushtarak) 11.14

探究対象 (mabḥūth) 4.12, 16.6

探求対象 (maṭlūb) 5.4, 9.10, 15.9
端緒 (mabda') 4.3
端的に捉えられた (muṭlaq) 7.11, 7.14, 7.16, 8.5, 8.8, 14.11
知 ('ilm) 4.1, 4.4, 5.9, 5.10, 8.5, 15.9, 15.11, 15.14; 知・知識 (ma'rifah) 5.9, 7.6, 8.10, 15.12, 15.13, 18.15, 18.16
知性 ('aql) 3.13, 8.7, 8.14
秩序 (niẓām) 19.6 ; (tartīb) 21.6
抽象された (mujarrad) 4.11, 10.10, 10.11, 10.12, 10.13
定義 (ḥadd) 4.12, 4.14, 5.11, 12.4, 13.2, 15.13, 15.14; (taḥdīd) 11.8
哲学・哲学的 (falsafah/falsafī) 3.11, 5.7
— 第一哲学 (falsafah ūlā) 3.7, 5.7, 5.11, 5.13, 15.9, 20.6
— 哲学者 (faylasūf) 16.16
天圏 (falak) 19.6
天使
— 霊的な天使 (malā'ikah rūḥānīyah) 19.6
天文学 ('ilm al-hay'ah) 19.7
統御 (riyāsah) 18.7
導出 (intāj) 20.7, 20.8
道徳的気質 (akhlāq) 4.6
同名異議 (ishtirāk) 22.14
特殊化 (takhṣīṣ) 15.4, 15.5, 15.6
特性 (khāṣṣah) 21.16

な行

名・名称 (ism) 17.3, 18.6, 21.12, 22.14, 23.9
能動因 (fā'il) 7.12
能力 (qūwah) 21.12, 21.14

は行

配慮 ('ināyah) 18.7
配列 (tartīb) 19.6
場所 (makān) 19.3
判断（知） ('ilm taṣdīqī) 4.1, 4.5
範疇 (maqūlah) 12.13, 13.6
万有・万物 (kull) 5.10, 21.5, 21.6
比 (nisbah) 22.11, 22.17, 23.15, 23.17
非限定的・端的な・何の限定もない (muṭlaq) 17.13, 17.14, 17.16, 18.3, 18.11, 22.14, 24.6
必然 (wujūb) 7.19
— 必然（的） (wājib) 13.18
— 必然的存在者 ⟶ 存在
評価能力、評価能力の (wahm/wahmī) 23.13, 23.18, 24.3, 24.7
表象（知） ('ilm taṣawwurī) 4.1, 4.4
附帯性 ('araḍ) 7.17, 8.2, 8.3, 13.18, 21.14, 21.16, 22.10, 22.12
— 附帯的性質・附帯する性質 ('āriḍ) 4.10, 10.15, 12.3, 12.8, 12.12, 13.3, 13.7, 13.17, 14.4, 14.5, 14.17, 15.8, 15.15, 24.5, 24.6
— 附帯ーとする ('āriḍ) 23.13, 23.14
物体 (jism) 4.9, 6.19, 4.9, 6.19, 10.6, 11.3, 11.5, 11.15, 11.16, 11.18, 12.3, 22.16, 23.17; (jismānī [or jusmānī]) 11.2 ; (jirm) 21.15, 21.16
— 物体的質料 ⟶ 質料
普遍・普遍的 ('āmm) 14.6; (kullī) 7.18, 9.2, 9.3, 13.17
部分 (juz') 9.2, 9.4
分割する (inqasama) 24.4
分離する (iftaraqa) 24.4
弁証論 (jadal) 16.13
— 弁証論的 (jadalī) 16.15. 16.17, 16.18
変化 (taghayyur) 19.3
奉仕 (khidmah) 18.9, 18.10
補助 (ma'ūnah) 17.11
本質・何であるか (māhīyah) 13.9, 13.11, 13.12, 18.13

ま行

面 (saṭḥ) 11.16, 12.4, 22.9, 22.16
目撃する (shāhada) 21.17, 22.1
目的 (gharaḍ) 7.15, 10.4, 16.12, 19.5, 21.1; (ghāyah) 17.15 ; (maqṣūd) 23.7
問題 (mas'alah) 15.1, 15.7, 16.1, 19.11, 19.16, 19.17, 19.18, 20.7, 20.12, 20.14, 20.15

や行

有益性 (manfa'ah) 17.3, 17.4, 17.6, 17.8, 17.10, 17.11, 17.13, 17.16, 18.1, 18.3, 18.9, 18.11, 18.12, 18.14

— 有益な・有益なもの (nāfiʿ) 17.5, 17.6, 17.14, 17.15
— 有益である (nafaʿa) 18.1, 18.2;(nāfiʿ) 19.9

有害なもの (ḍārr) 17.5

来世の幸福 ⟶ 幸福

ら行

立体 (mujassam) 2.9

理論的学 (naẓarīyah) 3.12, 4.7

理論的能力 (qūwah naẓarīyah) 3.13, 4.4

量 (miqdār) 10.10, 10.11, 10.12, 11.4, 11.14, 11.15, 11.17, 12.4, 12.7, 22.11, 22.12, 22.13, 22.15, 22.16; (kamm) 4.11, 4.12, 13.14; (kammīyah) 11.15, 12.13
— (カテゴリーとしての) 量 (kamm) 22.14

倫理学 (khulqī/khulqīyah) 6.6, 10.9, 13.19, 19.8

霊魂 (nafs) 3.13, 8.10, 12.15, 17.9

霊的な天使 ⟶ 天使

論証 (burhān) 5.4, 19.16, 19.17, 19.18, 20.1
— 事実の論証 (burhān anna) 20.9
— 根拠（理由）の論証 (burhān lima) 20.10
— 論証的な (burhānī) 8.15
— 論証された (mubarhan) 8.15
— 論証の書 (*Kitāb al-Burhān*) 5.3, 19.14

論理学 (manṭiq/manṭiqīyah) 3.9, 5.3, 6.6, 10.17, 12.10, 16.18, 22.13